

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ 「花」のまちづくり／
「花のまち」づくり

9

2007



おんねゆ温泉の町並み



女満別空港に近い「メルヘンの丘」



北見市はかつて世界のハッカの7割を生産していた。当時を伝える薄荷博物館



まつりのクライマックスを前に開かれた「YOSAKOIソーラン大会」

3 春夏秋冬 ● 「広島型分権改革」と合併後のフォローアップ 藤田雄山（広島県知事）

特集 「花」のまちづくり／「花のまち」づくり

4 花卉産業を取り巻く最新状況を見る

志村勝也（農林水産省生産局園芸課花き産業振興室長）

14 一ボケ治療の第一人者が語る花の効用—いま咲いている花を6つ言えますか

金子満雄（浜松早期認知症研究所代表・脳外科医）

9 愛知県 国内産地間競争よりブランド品輸出を

古井正司

12 岩手県八幡平市 「りんどう」がもたらした地域の幸せ

日影孝志

18 宮崎県 不滅の県民財産が出来上がるまで

渡辺綱纈

20 埼玉県深谷市 4年前は「生産だけ」のまちだったが

吉田二郎

28 長野県松本市 「花いっぱい運動」の始まりと今後

小岩井 淳

30 鳥取県とっとり花回廊 観光・生産に地域づくりにも

木村康志

32 北海道 〴〵ならでは、活かしフラワーツーリズムの展開

熱田洋子

34 福島市花見山 篤農家の心意気「家族で独占しては勿体ない」

菊地由美子

36 浜名湖ガーデンパーク 花博跡地は、かく輝き続ける

倉島克美

38 千葉県立上総高等学校 市民と交わり総合的な学習効果が

風間龍夫

40 東京都・向島百花園 東京下町の「緑の拠点」が目指すもの

椎名和美

7 私の普及活動「売れる花」づくりを目指して

伊東直美

レギュラーレポート

27 首長の挑戦 今や人口伸び率日本1に

矢田美英（東京都中央区長）

地域づくり団体探訪

42 出石城下町を活かす会

兵庫県豊岡市

地域活性化センターの助成事業

44 うまカレーってどんな味？ ～男女で料理するコンテスト～

秋田県鹿角市

46 センター通信

グラフィ

1・23・47 「花」のまちづくり／「花のまち」づくり
48 手前みそですが…●徳島県美波町

表紙Ⅱおんねゆ温泉まつり

（北海道北見市）

旧留辺蘂町（二〇〇六年に北見市と合併）

のおんねゆ温泉地区。町内を流れる無加川の川底からは温泉が湧出している。そこで温泉の神に感謝の意を込めて始まったのが「おんねゆ温泉まつり」だ。今年で五十八回目。

温泉の神は、きつと女神なのだろう。まつりのクライマックスは、女性を乗せた神輿を百人ほどの若者が担いだまま無加川の中を練り歩く「神輿川渡御」。

幅二十メートルほどの川だが、川底の岩はヌルヌルしていて、時に大人がようやく顔だけ出せるほどの深みが続く。

地元の若者のほか、全国から神輿担ぎが集まり、さらに精強な陸上自衛隊員が助っ人に入ったが、神輿ごと崩れそうになるシーンもあり、観る者をスリルと興奮の世界に引きずり込んだ。

●文Ⅱ室谷克実

●カメラⅡ小形又男



吹雪のような仕掛け花火の中、川の深みに入った神輿



「花の生産だけのまち」から「花のあふれるまち」へ ● 埼玉県深谷市 (p20)

まちの顔になったJR駅舎前とステーションガーデン

「花」のまちづくり／「花のまち」づくり



JR木更津駅前の花壇
を手入れする上総高
校園芸科の生徒たち

学んだことを地域で活かす
● 千葉県立上総高等学校 (p38)



君津中央病院の花壇も



海ほたるに「房総の春」を告げるのは、上総高校園芸科生徒たちの作品だ

北海道ならではの、の花の魅力を発信 ● 北海道 (p32)



ラムサール条約に登録された霧多布湿原

花木・花卉生産の場を皆に開放 ● 福島市花見山 (p34)

実は「私園」の花見山「公園」




広島県知事
藤田雄山

「広島型分権改革」と 合併後のフォローアップ

地方分権の理念は、これまでの中央集権を改め、地方自治体の自主性・自立性を高めることにより、自らの判断と責任において行政を運営していくことにあると考えております。

広島県では、こうした分権改革の理念に基づき、住民に身近な行政サービスを自己完結的に処理できる基礎自治体の実現を目指して、全国に先駆けた市町村合併や、市町への大幅な権限移譲に取り組んで参りました。

その結果、八十六市町村は十四市九町に再編され、市町村の減少率が全国トップとなりました。これはひとえに、全ての市町村が合併について地域の将来に関わる重要事項として真摯に議論され、選択された結果の賜物であります。市町村合併はそれ自体が目的でなく、今後の地方分権型社会の構築に向けてのスタートであります。

合併後の市町では、財政規模の拡大により効率的な財政運営が可能となるとともに、危機管理や情報管理などの専門組織の設置、公共施設の相互運用による利用機会の増大などの行政サービスの高度化・多様化、住民自治組織の再編・育成による住民協働の促進など、総合的な行政主体としての基盤づくりや広域的なまちづくりへの取り組みが着実に推進されております。

市町への事務・権限の移譲を行う「広島型分権改革」は二〇〇五年度から五年間に、県の八十一項目・百八十九の事務を移譲するもので、①市町の規模によって移譲する事務に差を設けることなく②五年間という計画期間内に③市町の実情に応じて移譲する——というものです。

これにより、住民に身近な福祉、保健、まちづくりなどの行政サービスを、市町において地域の実情に沿って自主的・総合的に提供できる体制を整備するものです。

昨年度までに、全ての市町と県との間で移譲の時期や方法などを定めたプログラムを策定し、現在、全市町でのバスポート

の申請・交付が可能となっている他、五つの町が福祉事務所を設置し、市における建築確認事務の拡充など、移譲の推進が図られております。

また、市町の規模の大小により移譲に差が生じないように、移譲事務の執行に必要な専門性と高度な技術力の確保や、小規模市町における事務処理への対応などの課題について適切な支援を行うことにより、円滑に移譲を進めたいと考えております。

このように合併の効果が徐々に現れつつある一方、現在の市町の実態を見ると、合併をしてもなお人口一万人未満で全域が過疎地域の町から、中国地方の中核拠点機能を有する人口百万人を超える政令市まで、また面積も最小と最大で約百二十倍となるなど、地理的・社会的条件が大きく異なっており、それぞれの地域固有の様々な課題に直面しております。

とりわけ、多くの限界集落が存在する中国山地の中山間地域や瀬戸内海の島しょ部など条件不利地域における諸課題への対応は、焦眉の急を要するものと痛感しております。

このため、限界集落への対応、地域住民の足を確保するための生活交通対策、中国五県で連携した医師確保対策、学校・保育所の統廃合後の支援、雇用確保対策など住民生活に密着した地域課題に対するフォローアップをきめ細やかに対応することにより、住民生活に支障を来さないようにするとともに、地域間格差解消へつなげていく必要があります。

今後、新分権一括法が三年以内に提出されるなど、道州制を視野に入れた第二期地方分権改革への取り組みは待ったなしの状況にございます。しかしながら、真の地方分権の実現については、市町の自立と理解・協力が不可欠であると考えます。これまでの「広島型分権改革」を実効あるものとするためにも、合併後のフォローアップについて積極的に取り組んでいきたいと考えております。



「花」のまちづくり／「花のまち」づくり

花卉産業を取り巻く最新状況を見る

花卉と地域との関係は、まず地域の重要な産業、いわば地域経済を支える主要なセクターの一つとして捉えることができる。次いで、花卉が持つ「人を癒す」「潤いを与える」などの機能・特性から花卉と地域を関連付ける捉え方がある。この二つの視点を踏まえて、花卉産業をめぐる情勢を概観し、地域活性化に向けた花卉の活用として、いかなる取り組みがあり得るか紹介したい。

花卉農業は、農業総産出額の六％程度を、また

全国の総販売農家数の四％程度を占めている。耕作条件の制約の下でも、施設を利用した集約的な生産により高い収益を上げることが可能だ。このため、今後もわが国農業の中で重要な位置付けを占め続けることが期待される。

例えば、花卉生産額の上位五県は愛知県、福岡県、千葉県、埼玉県、静岡県で、農業産出額に占

性化に寄与している（上表参照）。

○五年に農林水産省が策定した「花卉産業振興方針」では、利用の仕方を①生活空間を飾る（フラワーデザイン、生け花、盆栽、寄せ植えなど）②育てる・庭を飾る（ガーデニング、造園など）③気持ちや伝達する（母の日、花言葉、仏花など）④快適環境を創造する（屋内緑化、景観形成、都市緑化、屋上・壁面緑化など）⑤人を繋ぎ、コミュニティを創造する（花のまちづくり、オープンガーデン活動、園芸博覧会などの花卉のイベント、フラワーリズムなど）⑥加工して利用する（ドライフラワー、押し花、ブリザーブドフラワーなど）⑦福祉を増進する（花卉園芸福祉、科学・情操教育など）——と分類している。

世論調査を見ると、国民の六割以上が物質的な豊かさより、心の豊かさを求めているといわれる。潤いのある国民生活実現のため、花卉は重要な役



農林水産省生産局園芸課
花き産業振興室長

● 志村勝也

割を担っている。

花の機能は、地域の活性化の観点からも注目すべきだ。豊かで住みやすい地域、自分の故郷に誇りと愛着を持ち、住み続けたいと願う地域の創造や、将来の地域を担う子どもたちの地域への愛情、豊かな情操を育むために、花は一役買う。

需要停滞の中、輸入切り花は増加

花卉産業は、生産から中間流通・加工・小売までの広がりを持ち、その規模は産業連関表を基に推計すると、二〇〇〇年基準で約一兆二千億円（産出額が五千七百十三億円、商業マージンは六千百十三億円）になる。

全体としての花卉の需要は、近年横ばいしないしは微減傾向にある。切り花類の国内需要量（国内生産と輸入）も同様の傾向にある。

そうした中で、切り花の輸入は増加しており（図1参照）、国産花卉の国際競争力の強化、ブランド化・差別化、花卉消費拡大が課題となっている。品目の多様化が進む中で、主要品目であるキク、バラ、カーネーションは共に横ばいしないし微

2004年度 花卉産出県ランク

順位	都道府県名	花卉総産出額 (億円)
1	愛 知	826
2	福 岡	392
3	千 葉	368
4	埼 玉	275
5	静 岡	250
全 国		5209

める花卉の割合（二〇〇四年）は、各二五・三％、一七・八％、八・七％、一四・〇％、九・六％を占め、地域の花き産業の振興は地域の農業、経済の活

※「花き」と「花卉」：特に申し出のあった固有名詞を除き、「花卉」に表記統一しています。



図1 切り花類の需要量推移

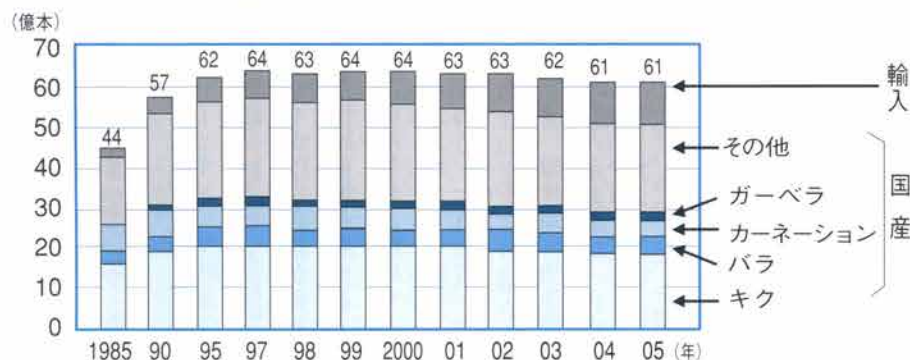


図2 鉢ものの類の需要量推移

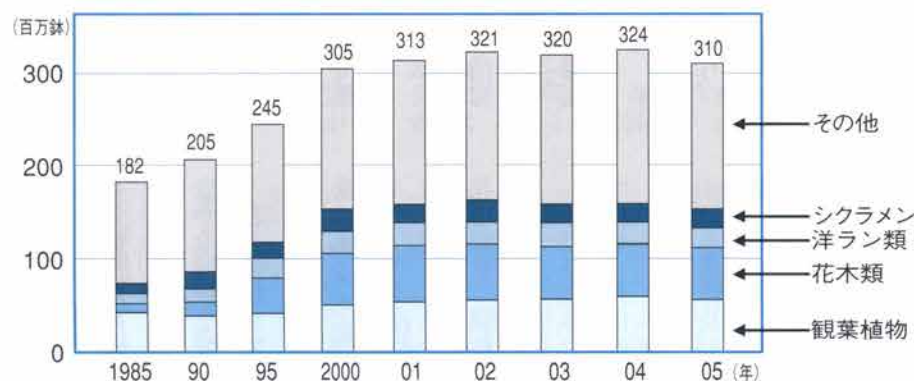
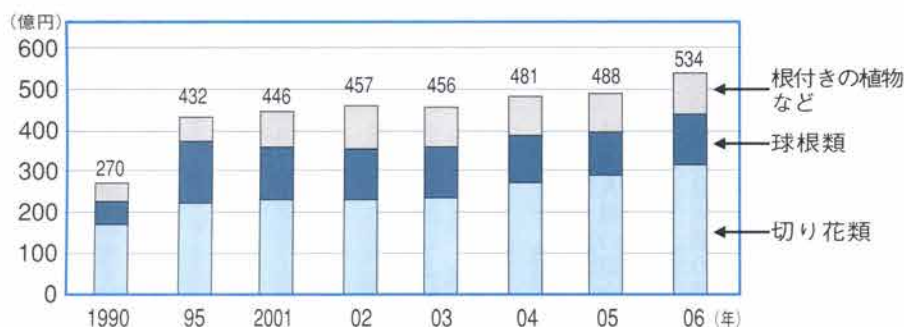


図3 花卉の輸入金額推移



減傾向にある。

鉢ものの類の国内需要量（国内生産）は、〇四年までは増加傾向で推移したが、翌〇五年は三億一千万円と若干減少した。品目別では観葉植物、花木類、洋ラン類、シクラメンが横ばいしないし微減傾向にある（図2参照）。

苗ものの類の国内需要量（国内生産量）は〇二年には九億本まで増加したが、以降減少に転じ、〇五年は八億二千万本だ。

高級花卉を輸入する中国

球根類の需要量（国内生産と輸入）も近年は減少傾向にあり、〇〇年の九億五千百万球が〇五年には六億八千二百万球まで低下した。

輸入は、切り花類と球根類が大部分を占め、〇六年は総額五百三十四億円（図3）。特に切り花の輸入が増加しており、前年比六％増の十一億本、輸入比率は約一八％になった。

輸入切り花は、価格の優位性に加え、物流技術の向上とも相まった長期安定供給体制の整備などにより取扱量を伸ばしている。主要品目別では、キク、カーネーションが拡大。バラは増勢は鈍化しているものの依然として増加している。

一方、輸出は、約八割を占める鉢物・盆栽を中心に近年増加傾向にある（8頁図4参照）。

中国などでの高級ブランドとしての高品質花卉の需要の増大を背景に、国産花卉の輸出機会は着実に増大していると見られる。特に〇六年には、前年比約一五〇％の二十八億二千万円と大幅に増加した。

中国、香港、台湾、イタリア、オランダ、米国などが日本からの一億円超の花卉輸入国だ。中でも中国向けは前年比ほぼ倍増の十一億円以上になった。大半が鉢物・盆栽・植木類だ。

消費者は「日持ち」を求める

切り花の消費は近年、業務用（冠婚葬祭用、稽古用など）の比率が低下し、家庭用などの店頭売り（家庭用、贈答用）が増加する傾向にある。

切り花を一年間に一度以上購入した世帯の割合（年間購入世帯割合）は四割程度であり、家庭用など生活需要にはまだ拡大の可能性がある。

一方、鉢物、花壇用苗ものを含む園芸品・園芸用品は、ガーデニングなど家庭園芸の普及に伴い、年間購入額、年間購入割合とも着実に増加してきたが、近年購入世帯割合は三割程度で横ばい、購入金額は減少傾向となっている（8頁図5参照）。総じて見ると、ガーデニングが国民生活の中で



定着してきたと見られ、切り花は家庭用の割合が高まる中で、「日持ち」が一層重視され、値頃感を求める傾向が強まっている（8頁図6参照）。

《花育》への取り組みが進む

花や緑に囲まれると、人は明るい気持ちになる。花や緑をきっかけに会話が弾み、人間関係がスムーズになり住民意識が高まる。また、花や緑で飾られた街は環境美化が徹底すると言われる。

綺麗な花が良いコミュニティを育てることに繋がる。家庭や公共の場で、花を介した交流を活発に行い、生き生きとした美しく心地良い地域をつくると、コミュニティの活性化や観光など地場産業の振興にも結び付く。

「国際花と緑の博覧会」を契機に花のまちづくりコンクール推進協議会の主催で、「花のまちづくりコンクール」が毎年開催されている。ここ五年間でも毎年千二百件以上の応募があり、全国で様々な取り組みが行われている。

昨年は、富山県氷見市と静岡県立磐田農業高校が大賞を受賞した。

氷見市は、市民の主体性を尊重しながら花のある町並みづくりを進め、コミュニティの再生、観光振興などの成果を上げている。

県立磐田農業高校は校内でのバラ園や花壇づくり、駅や市内の公園での花壇作りに全校生徒で取り組んでいる。

カナダでは、校内暴力で手の付けられなかった少年たちに、学校花壇のデザインから種まき、移植、草取りなど全てを任せたことにより、自発的

に登校し、積極的に作業するようになったとの事例があるという。仲間と一緒に花を育てることで、責任感や命の大切さ、思いやりの心を学ぶことになる——即ち植物にかかわることが子どもたちの豊かな情操を育むこととなる。

花の多様な機能に着目し、花を教育活動に取り入れ、花や緑を楽しめる多様で豊かな心を養う活動である《花育》が各地で取り組まれている。また、地域協議会、花卉生産者、花店、学校、公益法人などが、教育現場、農場、公共施設などに花壇作り、栽培、フラワーアレンジメントなどを実践している。

花業界全体でも「花育」に対する意識が高まっており、人材の確保と質の向上、活動人員の紹介の仕組み作りなどが課題とされている。このため、(財)日本花普及センターが、全国的な推進組織の構築、マニュアルの策定、ネットワークの形成を進めることにしている。

イベントは各地で盛ん

花卉の消費拡大は、生産者の大きな関心事だが、地域で生産された花を、地域の人々に楽しんでもらうことも地域の活性化に寄与する。

全国の多くの都道府県で様々な花卉イベントが開催されている。また、国内最大規模の花の祭典であるジャパン・フラワー・フェスティバルは、これまで全国各地で十七回、平均すれば一日三万人以上の入場者を集めている。今年は三月に香川、六月に埼玉でそれぞれ三日間で開催され、いずれも十万人以上の入場者があった。

このようなイベントでは、開催地の自治体や花卉関係者により地域の特徴ある花卉が多数出展され、地域の花卉と接する機会を提供することで人々に花に親しむきっかけを与え、地域の花の消費拡大にも繋がっていく。

また農林水産省、(財)日本花普及センター、(財)花の国づくり運動全国花卉振興推進協議会が連携し、消費者に花の魅力、すばらしさを伝えるため「花っていいよね」キャンペーンを進めている。

「花のコミュニケーション・ワード」の「いいことあった日、花を買う」や、シンボルマークの「フィオリスタ・マーク」を使って、花卉の利用・消費・購入の機運作りを行っている。

熊本県は〇六年度、全国的なキャンペーンを活用しながら、県の独自の取り組みとして、「くまもと花っていいよねキャンペーン」と銘打って、県内の協力生花店による生花店頭キャンペーン、展示即売会やガーデニング講座などを開催した。

産地のブランド化を目指そう

国産花卉が輸入品に対抗しつつ、国内シェアを維持・回復していくためには、消費者のニーズに対応し、一層の低コスト化や高付加価値化による競争力の強化に向けて、担い手を中心として攻めの取り組みを進め、力強い生産供給体制を確立していくことが必要だ。

国産花卉の長所である「日持ちの良さ」を確保しつつ、ホームユース用の中短茎生産技術や周年生産技術の普及による低コスト生産流通体制の構築、産地オリジナル品種の開発・普及、高級花卉



の安定供給体制の構築による産地ブランド化——を推進していくことが重要だ。

他方、消費者ニーズの多様化に対応した需要拡大と産地育成を図るためには、如何に消費者に産地をアピールしていくかがカギとなる。

産地が地域、品種、鮮度管理、産地の特色、こ

千葉県の海浜農林振興センターは銚子市、旭市、匝瑳市の三市を担当しています。ここは県内最大の園芸産地で、そのうちの二・七％が花卉です。品目は切り花から鉢花、観葉、洋らん、花壇苗、植木と多種多様です。

「お客様に喜ばれる商品を生産し、花卉の価格低迷を打開して有利販売したい」のは、花卉生産者共通の願いでしょう。しかし現実、なかなかそうはなりません。それどころか、海浜地域の花卉販売額は一九九七年をピークに徐々に低下し、経営改善が必要になっていました。

生産者にまず取り組んでもらった第一歩は、消費者になって花を買ってみること。これにより「売れる花」と「売れない花」の違いが分かってきます。花卉販売の実態を知ること重要です。それが販売力を高め、経営改善にも繋がっていきます。

消費者の視点、流通販売の実態を知る——つまりマーケティングの勉強です。

二〇〇三年からは「最終的なお客様は消費者」を合言葉に「ちば 花と緑の生産者紹介」をコーディネートしました。これは、まだ全国に例

だわりなど、消費者へのPRを通じて差別化、ブランド化していくためには、消費者への花卉供給の重要なチャンネルとの戦略的パートナーシップの構築が課題だ。

他方、小売サイドでは、鮮度・日持ちの良い品質の高い花卉、特徴ある花卉の提供のニーズが高

を見ない花卉販売促進活動だと思っています。

まず、品目が豊富な切り花、鉢物、植木に関して、生産者側のネットワークをつくり、全国の花丹流通・販売関係者に情報を発信しまし

た。そして、

私の普及活動

「売れる花」づくりを目指して

千葉県海浜農林振興センター
振興普及部農業改良課 伊東直美

全国の花丹市場、小売店な

どの販売関係二百三十社に

PRする展示

商談会・農場

見学会を設定

しました。そ

れは生産者自

らが、花と緑

を紹介するプ

レゼンテーシ

ョンで、生産

者と流通・販売関係者がパートナーシップを築

くことが目的です。

産地紹介は、生産者の名刺づくり、顔写真入り資料作成から始まりました。展示会には、夫

まる中で、消費者ニーズを踏まえた、生産サイドとの安定的な取引関係の構築への関心が高まっているが、生産サイドとの接点が必要しも十分ではない。

このため、卸売業者の生販連携のプロデュース機能を活用しながら、最適な産地と小売との組み

婦や親子で出席するようになり、この地域の花材だけによる模擬店頭をつくらせて紹介しました。また農場見学会も催しました。

その結果、来場者から「情報交換ができて生産状況が分かる」と高い評価をいただき「新たな産地」と認知されました。

来場者は、当初七十九社でしたが百四十七社に増えて、北海道から九州の花丹市場・流通販売関係者に広がりました。新たな販路開拓もでき、販売額も一二〇％と増加し、経営の向上に繋がりました。

この普及活動は、地域や品目の枠組みを超えた一体的な花卉産地支援活動です。広域的な技術交流や販売促進活動ができる組織や、リーダーの育成へと広がっています。

小さな点も集まれば、大きな力になります。地域の花丹生産者が主体となった取り組みが県内に広がり、やがてお客様を繋ぎ、新たな産地として紹介し合うことができれば、お互いの産地の活性化になります。花卉生産者が産地として自立できることを願って、農家の応援団として普及活動に努めています。



図4 花卉の輸出金額推移

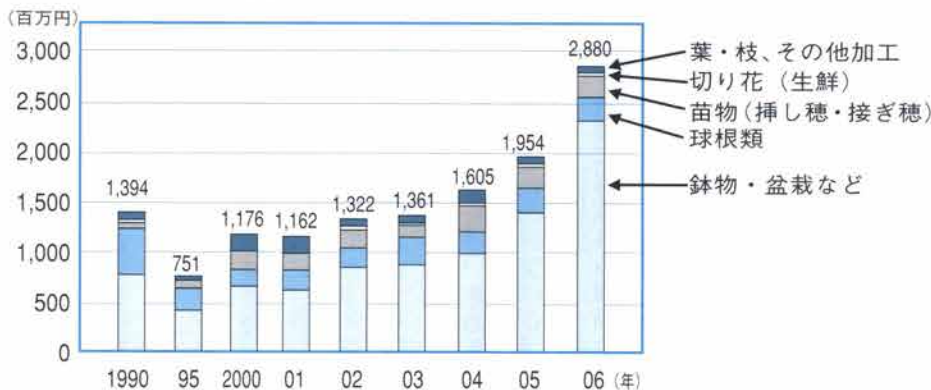


図5 花卉の世帯当たり購入金額及び年間購入世帯割合の推移

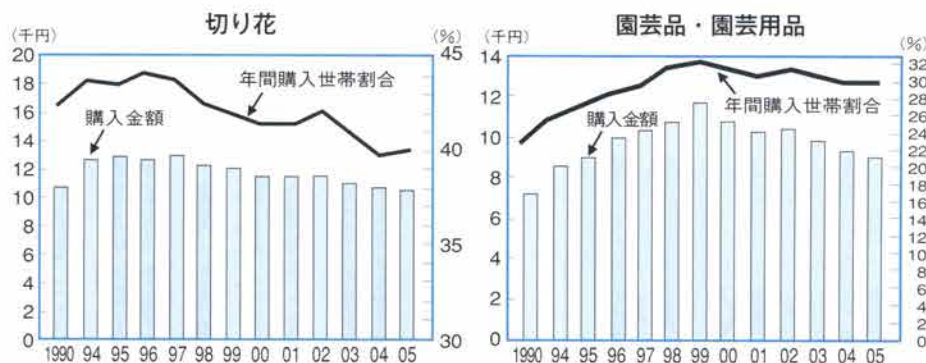
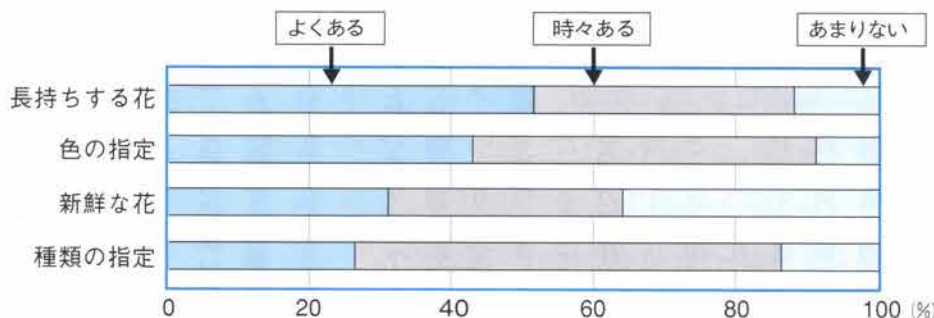


図6 消費者の切り花に関する要望



合わせを実現するための戦略的な生販連携の促進が必要なわけだ。

農林水産省は〇五年度から花卉生販連携促進交流大会を四回実施している。今年も九月に福島県、十一月に愛知県で予定している。この大会は戦略的なパートナーシップを形成するためのきつかけの場と言える。

既に千葉県のように生販連携促進に取り組んでいる地域もある(前ページ「私の普及活動」参照)。

地域団体や自治体は、生産者に販売促進の機会の設定のために重要な役割を担っている。今後、各地で生産者や卸小売などの流通業者、自治体が連携して、この生販連携の取り組みを展開し、産地のブランド化を図っていくことが重要だろう。

「輸出」という活路がある

政府は農林水産物の輸出を一三年に一兆円に拡大するため、今年五月、「我が国農林水産物・食

品の総合的な輸出戦略」を策定した。花卉も、輸出拡大に向けた工程表を策定し、輸出拡大に積極的に取り組むこととしている。国内市場が横ばいしないし微減傾向にある中、輸出を新たな市場として位置付けることは重要な戦略だ。

需要期の違いに着目し、日本の四季折々の花卉の多様性などの強みを活かせば、日本産花卉の輸出拡大の余地はまだ大きいと考えている。

農林水産省の花卉輸出に関するアンケート調査は、十六都県、二十五産地の生産者からの回答を得ている。盆栽八事例、切り花六事例、鉢物五事例、植木、苗物、球根が各二事例ある。〇〇年以降に取り組みを開始しているところが多い。

輸出先は、EU向けが盆栽を中心とする事例、中国や東南アジア向けは十二事例だが、切り花、鉢物、盆栽など幅広く輸出されている。

課題としては、輸送コストの削減・手続きの簡素化、輸送中のダメージの軽減、各国の植物検疫への対応、国内の病害虫対策などがある。それでも、約三分の二の産地(生産者)が輸出を増加させたいとの意向だ。

現状は輸出を行っている生産者はまだ一部であり、輸出意欲も産地により相当な差がある。また相互連携に乏しく、情報の共有も不十分だ。

このため、生産者、市場、輸出入業者など様々な主体が集まり、情報の収集、交流活動、海外広報活動等と連携して行う全国的な組織として「全国花卉輸出拡大協議会」が今秋設立される。花卉産地も、輸出を重要な戦略分野として位置付け、この動きに参加することが有効だろう。



「花」のまちづくり／「花のまち」づくり

1 愛知県（産出額日本1）

国内産地間競争よりブランド品輸出を



愛知県農林水産部園芸農産課長

● 古井正司

愛知県といえば自動車工業となるが、実は全国で五番目の農業県でもある。そして花卉部門はダントツの日本一だ。盛んな花の栽培こそ、「元氣な愛知」の原動力なのかもしれない。

愛知県の農業は、温暖な気候などの自然条件、

地元中京市場を控え京浜、京阪神の中間に位置する立地上の利点、それに生産者や農業関係者のたゆまぬ努力により発展し、農林水産省の生産農業所得統計によれば二〇〇五年の農業産出額は三千二百七十五億円で全国都道府県で五位だ。その中で、花卉の生産は七百三十一億円と全体の二二・三％を占めている。これは全国の花弁産出額四千五百四十四億円の一八・一％に当たり、全国一位だ。また県の主要花卉のほとんども全国一～二位にランクされている（11頁の図参照）。

（屈指の施設園芸産地

愛知県の花弁生産で特徴といえるのは施設栽培面積の広さだ。園芸用ガラス室・ハウスなどの設置状況調査（農水省生産局野菜課）によれば、花卉栽培用ガラス室・ハウスの設置実面積は、本県が全国の一四・一％を占めて（花卉栽培用ガラス室のみでは同三九・五％）、全国有数の施設園芸

産地であることが分かる。

中でも、電照栽培は本県が発祥といわれる。これにより周年出荷を可能としているキクは、産出額二百七十五億円で、重要な品目だ。

本県は、キクを含め多様な品目の生産振興に取り組んできている。基盤整備的な面からは花卉温室団地の造成や共同育苗施設、栽培機械などの整備導入、切り花のキクやカーネーションでは共選共販によるスケールメリットを活かすための選花施設や集出荷施設などの整備を進めてきた。

これら補助事業の利用による営農基盤の整備件数は、花卉産業では近年減少傾向にあるが、施設園芸産地としての本県の花弁産業成立に多大な貢献をしてきたといえる。

愛知県が全国一の花の生産県であることを、県と関係団体は連携しながらPRに努めてきた。県産花卉のPR活動は、①品質、栽培技術力の高さを競い、消費者に認知してもらう品評会の開催②花を豊富に使い、花に対する興味を喚起するイベ

ントやディスプレイ展示の実施③使い方を知ってもらい消費拡大に寄与する講習会の開催④「あいちの花」を題材にしたパンフレットなどPR資料の作成と配布——などが挙げられる。

こうした取り組みにより、愛知県の花は品質が高いこと、どんな花が栽培されているかなどを消費者に紹介し、消費喚起を図ってきた。

県には花卉生産者で組織される「愛知県花き温室園芸組合連合会」がある（〇六年度会員数二千九百十二人）。同連合会は県内全域を網羅する十二の地区会員と品目別に組織される八つの部会から構成され、連合会として前述の県が取り組む品評会やPR活動に参加・協力している。

さらに品目別八部会は、技術研修会や、新品種育成に関する検討会、消費拡大のためのPR活動を積極的に展開している。

同連合会は来年は設立五十周年を迎える。県の花弁産業振興に欠かすことのできない組織だ。

行政と農協など関係機関、生産者組織が密に連携し、営農基盤の整備から流通体制の合理化、消費啓発活動までを協同して実施してきたことが、本県花卉産業が発展した理由の一つだ。

（ダントツ1位県も悩みは多く

一九六二年以来、花卉生産全国一の本県だが、花卉産出額は九八年頃をピークに漸減傾向を示している。その理由としては①切り花の輸入が年々増加している②ガーデニングブームが落ち着いてきた③経済の不況の長期化により業務需要が低迷した④消費の動向が多様化してきた——などが挙





げられる。

特に輸入切り花では、キク、ばら、カーネーションといった本県の主力切り花が増加していることが問題だ。

財務省の日本貿易月表によれば、花の輸入額は〇五年には五百十二億円となり、八九年に比べ二二〇％の伸びだ。これは国内の花卉産出額四千五百十四億円の二・六％に相当する。部門別では切り花が二百五十四億円と全体の約半分を占める。

花卉輸入が増加してきた主な要因は①消費の拡大と周年化が進展している②発展途上国などが海外資本を導入して花卉輸出に力を入れてきた③消費の多様化で洋花の消費が増加している——などで、今後も輸入花卉は増加すると考えられる。

このように花卉の生産流通のグローバル化が進む中では、国内の産地間競争ばかりに目を奪われていてはならない。

国際的な情報収集に努め、関係者が団結して県内産地が取り組むべき課題や羅針盤となり得る発想・手段を継続的に模索していく必要がある。

また業務需要では「キク離れ」問題がある。業務用途では、セレモニ―センターの増加により花の利用は増えているが、花祭壇ではキク以外の花の使用が増加傾向にある。

〇二年に百万人台を超えた死亡者数は、わが国の人口動態を考慮すると今後も増加すると予想され、業務需要としてのキクの消費は堅調であるとの見方も一部ではあるが、決して楽観はできない。生き残りが可能な産地、経営体の育成が急務だ。実需者のニーズに応えるには、前提条件として

生産性の向上と省力、低コスト生産に取り組むことが大切だ。

その上で、①徹底した栽培管理や選花選別による品質優位性の確保②実需者ニーズの調査に対応した商品作り③組織としての独自品種の開発④パケット流通や低温輸送など日持ち対策強化による商品力の向上⑤契約取引など販売（営業）力の強化⑥企業の農家の育成・確保と新しい共販組織・体制構築の研究——などを進めていく必要がある。

本県の花卉生産の特徴は施設園芸が盛んなことだが、施設栽培延面積の約七割が加温栽培であり、重油価格高騰による施設園芸農家の経営への悪影響は看過できない問題だ。

本県では、花卉をはじめとする施設園芸品目について省エネ設備（二重・三重被覆カーテン、多段式サーモ、循環扇、NEDO支援事業を活用した高効率暖房機など）の導入を推進している。

また、作型や栽培品目の見直し、低温耐性品種の導入といった栽培方式の改善や、環境負荷の軽減にも繋がる石油代替エネルギーの活用推進にも取り組んでいる。

（多様な後継者対策を推進）

花卉産業に限らず、農業生産を発展させていくには、意欲のある青年農業者を確保し、優れた農業経営体を育成することが重要だ。本県では九五年度に「愛知県青年農業者育成確保に関する基本方針」を定め、関係機関、農業団体と連携を図りながら推進してきた。

残念ながら県の青年農業者（三十九歳以下）は漸減傾向にあり、九七年度の三千七百七十二人が〇六年度には二千九百六十五人にまで減少した。

県は七千戸の認定農業者を「愛知県の農業を支える経営体」として育成することを目標に様々な施策を展開しているが、当該目標を達成するために必要な年間の新規就農者数二百人に対して、〇六年度の実績は百七十一人。新規就農者確保に向けて継続的に対策を図ることの必要性が指摘されている（なお、部門別に見た新規就農者数では花卉部門が四十七人でトップ）。

後継者対策としては①学齢に応じた就農への動機付け（農業理解のための学習活動の支援）②鉢物・緑花木、切り花専攻がある愛知県立農業大学校などによる新規就農者の養成③就農希望者に対する情報提供や就農相談活動の実施④就農直後の青年農業者を対象とした濃密的な指導実施による技術・経営の基礎固め⑤4Hクラブなどの青年農業者組織の活動への参加誘導による社会性の育成——などを総合的に実施している。

また、近年は農家子弟以外の青年が就農を志すケースが増えている。愛知県立農業大学校では構造改革特区の認定を契機に〇四年度から就職相談会を実施し、学生に対して農業法人などへの就農を斡旋しており、農業への新規参入者の増加に貢献している。

（オリジナルのブランド化と輸出）

本県では、九四年一月に策定した「愛知県花卉生産振興指針」と「あいち農林水産業ビジョン二



タイ王国国際園芸博覧会に出展した愛知県のコーナー

2005年度 花卉産出額の全国シェア



出典：生産農業所得統計

○「一〇」で花卉産業の振興目標を示し、今日まで様々な施策を展開してきた。しかし、先に述べた通り、本県の花卉産出額は近年漸減傾向を示している。

一方、国は〇五年三月に花卉産業を取り巻く情勢の変化に対応するため、新たな「花卉産業振興方針」を策定し、生産者、種苗会社、卸売業者、小売業者など花卉産業界が主体となった今後の基本的方針と具体的な取り組みを示している。

このような状況を踏まえて、〇六年三月に「愛知県花き生産振興指針」を改正し、全国をリードする花卉生産のさらなる発展に向けて、今後五年間に生産者、農業団体、行政、流通関係者が連携して取り組む以下のような重点取り組み事項を明らかにした。

【多様な消費ニーズに応える生産性の高い生産構造】

【環境や安全性に配慮した花卉生産の推進】 環境や農産物の安全性に対する県民意識の高まりに対応するため、花卉でも環境に配慮した栽培技術の確立と導入を一層推進する。

適切で効果的な施肥管理、農薬使用の推進を図るとともに、生分解性資材の活用やリサイクル可能な資材の利用を推進する。施設の加温などでは、

不必要・非効率的なエネルギー使用がないように努める。

【流通・消費事情の変化に対応した集出荷体制の整備・改善】 市場流通や消費事情の変化に対応し、輸送方法の改善や集出荷体制の整備に努める。

日持ち性の向上のため、バケット輸送や低温輸送の推進を図るとともに、市場との間の情報伝達の迅速化により実需者からの要請に的確に対応できる集出荷体制を整備する。

【生産者自らが需要を創造し、マーケットを開拓する活動の強化】 花卉は「はやり」「すたり」の振れが大きく、生産者自らが消費拡大のための活動を行い、輸出を目指した新たな取り組みや、オリジナル品種の育成によるブランド化を進める必要がある。

生産者自らがホームページの開設やメディアへの働きかけにより消費者へ情報の発信ができるよう支援するとともに、輸出の前提となる海外の情報収集、生産者による育種の支援を行う。

【花卉の持つ様々な機能を活用した需要の創造】 新たな需要を開拓するため、花を利用したまちづくりや園芸福祉活動など、花卉の持つ様々な機能を活用した活動の推進を図る。

【経営体や生産者組織の育成強化】 これまでに述べた高度化した生産・販売活動への取り組みを行うため、経営能力に優れた経営体の育成を推進する。また、同様に消費拡大を始めた様々な組織活動や流通事情の変化に対応するため、愛知県花き温室園芸組合連合会や系統農業協同組合の組織育成を強化する。



「りんどう」がもたらした地域の幸せ

水田に花を植える——当時としては非常識な取り組みを始めたのは4Hクラブの若者たちだった。怖いもの知らずの挑戦を繰り返しながら、自ら基金を造成した手堅さ。そして改良普及員の指導。いま岩手県は花の輸出県になろうとしている。

（怖いもの知らずならでは

岩手県八幡平市安代地区（旧安代町）の4Hクラブが一九七一年、りんどう栽培に取り組んだのがすべての始まりだった。

「水田に花を植える」行為を若者が中心となって始めたのだ。翌七二年には十九人の生産者で花卉生産部会を設立した。

岩手県園芸試験場の吉池貞蔵先生や改良普及員の玉山清さんの指導もあり、様々な失敗を克服して、七三年には初出荷にこぎつけた。七六年には出荷額五千万円、八〇年には一億円を突破し、五年には岩手県が長野県を抜いて全国一のりんどう産地になった。

スタート時点から若者が中心だったため、いろいろの点でぶつかることもあったと聞くが、部会員が夜中まで酒も飲まないで熱心に討議し、いいアイデアを見つけ実行していった。

始めた当時、りんどうの栽培技術が確立していたわけではなかったから、多くの苦勞があった。

まず、育苗技術の確立が最大の課題で、これには育苗専門の生産者を育成して対応していくことを決め、大きく栽培面積の拡大に貢献した。

次にお盆に開花する品種がないことから、半促成栽培に取り組んだ。二メートル近く積もった雪を三月に取り除きハウスをかける——大変きつい仕事だったが、怖いもの知らずの若者たちは七五年から、これを実行している。

七六年には部会員自らが出て厳しい規格検査体制もスタートさせた。また、この年から部会員全員による年一回の一斉圃場巡回による徹底した栽培管理が行われている。

（自分たちで1本1円の基金

八一年には、お盆やお彼岸に出荷できず単価が低迷したことから、切り花一本につき一円を積み



八幡平市花卉研究開発センター所長

● 日影孝志

立てる価格安定基金を生産者が自ら創設した。この決定が将来に大きく影響することになろうとは誰が予想したのだろうか。

価格安定基金の創設後、りんどうキャンペーンなどの宣伝活動や、市場訪問による宣伝活動により単価が安定して推移したため、基金を取り崩すことなく五年が推移した。

八六年、安定基金の利子を活用して「新品種開発」事業をスタートさせた。各生産者が自分の畑にある優良な株を持ちより、優秀な育種素材を収集し、試験圃場を設けた。当時の改良普及員も育種を支援してくれ、九二年には初めてのオリジナル品種「安代あしろの秋」が誕生した。

九一年には「安代町花卉振興協議会」を設立し、オリジナル品種の権利保護と活用の方法を決めた。

育成された品種を販売した時は一本一円を研究協力費として収めるという取り決めがなされた。これにより、品種育成のための資金の捻出は可能となったが、育種を体系的に行うには専門家が必ずやだ。そこで町と農協にお願いして、専門家を呼ぼうということになり、九二年に「安代町花卉開



発センター」が開設され、県園芸試験場を退職された吉池先生が初代の所長に就任された。

（品質改良研究費は生産者が

九五年には町の事業として研究棟が建設され、九六年に町立の「安代町花卉開発センター」となった。

育種事業は町職員が行い、その品種育成のための資金は生産者が研究協力費として拠出するという体制が、形や名称は変更しているが、今も継続している。

センターは二〇〇六年十一月、第一回ジャパンフラワーセレクション「花卉新品種ビジネス大賞」を受賞した。受賞理由は品種別の生産量で日本一になった「安代の夏」をはじめとする十品種に及

ぶ品種開発の取り組みが評価された。

○六年度の統計によると、八幡平市内のりんどう生産者は二百一人、栽培面積百十四ヘクタール、りんどう販売本数二千五百九十五万本、販売金額十一億一千四百万円となっている。

八幡平市のオリジナル品種がりんどう振興に大きく貢献していることが分かる。

（海外委託生産から対欧輸出も

当センターが中心となって行ってきた活動として、オリジナル品種の日本以外での積極的活用があり、代表的なものとしてニュージーランドとの花交流がある。

これは九一年から取り組んできており、オリジナル品種をニュージーランドの生産者に委託栽培



(上) りんどう生産者たち (下) 輸出用に梱包されたりんどう

してもらい、冬場も国内市場に出荷するなど「安代りんどう」の国際ブランド化への取り組みを行ってきた。

このニュージーランドの交流がきっかけとなり、〇二年からは八幡平市からヨーロッパへの試験輸出をスタートさせている。

生産者が毎年ニュージーランドやヨーロッパなどを訪問し、日本以外の国のりんどう生産や農業に触れる機会を持てたこと、各国の生産者が八幡平市を訪問し交流したことは生産者の意欲の向上に繋がっている。

八幡平市のりんどうは生産者の創意工夫と地道な努力、そして仲間づくりにより日本一の産地になった。

りんどうが地域にもたらした幸せが未来永劫続くことを祈念しながら、花卉生産部会創立三十周年記念誌（〇一年）に載せられた生産者の「思い出花語り」を引用して、まとめたい。

「二輪のりんどうを朝露の中で初めて見た時の感動を今でも忘れることができます。今まで確かな目標があり、各年代との輪が花を中心として広がって、それが今後も続いていくことを願っています。

安代にりんどうの贈り物がなかったらと考える時、もう一度りんどうへの思いを新たに、花作りへの情熱と信念を誰もが持ち続けてほしいと思います」

「産地は自分たちのオリジナル品種を持つことで強くなれる。ニュージーランドとの交流も深め北半球と南半球が育種の交流によって新たな消費を起すことも考えなくてはなりません。産地は努力をしなくなった時、後退しつづける。

すべて人が関係することが多いので私たち生産者一人ひとり小さくてもまとまることにより産地として伸びることができる。自分たちの役割をしっかりと果たすことです」



ボケ治療の第一人者が語る花の効用

いま咲いている花を6つ言えますか



浜松早期認知症研究所代表・脳外科医

金子満雄

私の干からびかけていた脳に

私にとって「花のある町」の原風景とは、南ドイッのガルミツシュ・パルテンキルヘンという田舎町だったと思うが、もしかしたらオーストリアのインスブルック周辺の田舎町だったようでもある。カラフルな中にもシックさが冴えるログハウス仕様の二階、三階建ての家並みが整然と並び、庭にはまるで自然に咲き誇ったかのような花壇がそれぞれ工夫を凝らして作られていた。

何より私の目を引いたのは二階、三階の窓やベランダに並べられたゼラニウムの鉢だった。真っ赤な花は目が射られるほどで、桃色、白、斑入りなどの花が多様な形や色の鉢に植えられている。町全体が、まるで雛祭りの雛壇のようで、しばし見惚れたものだった。

日本を発つ前の私は、オンボロ四畳半のアパートに住み、脳外科手術を修得することが先決問題で、花に思いが及ぶことなどありもしなかった。

終戦から二十年経った頃だったろう。

感性が干からびかけていた脳に強烈に入り込んできた原風景は、その後の私の人生の曲がり角のたびに道標になってくれたように思える。

爾来四十数年、機会を捉えては世界のあちこちらの町々を走り回り、花の写真を撮っているのも、初めて目にしたヨーロッパの原風景が脳裡に深く刻まれているからだろう。

花のある町には、その地域特有の音楽があり、民族舞踊があることに気付かせられる。人々は折にふれ集まっては歌い、踊り、ビールのジョッキを傾け合う。それらすべてが人々の感性を培い、花を愛でる習慣が身についたのだらうか。

そんな町に住む人々は心豊かで、気さくであり、道を尋ねても丁寧に教えてくれる。目的地まで一緒に連れていってくれることも珍しくなかった。

ボケは「心の生活習慣病」

人は生活にゆとりが生まれた時に、花のことを

考えるのだろう。

わが国でも、戦後食うに困っていた時代には、誰も花に心が向かう余裕はなかった。空いた土地があればサツマイモなど食料になるものを植えていた。

「花いっぱい運動」も、当初は「腹いっぱい運動の方が大切だ」と揶揄されたという。

私はここ三十年、日本各地の市町村を見て回る機会に恵まれた。

私は三十余年前に認知症（痴呆症、ボケ）の新しい早期診断法を開発した。以来、各地域で認知症の疫学調査をしては、地域ぐるみの早期治療に努めてきたからだ。

幸い、その成果は年々、着実に上がってきている。地元の高齢者を集めての「ボケ予防講演会」も数限りなく実施してきた。今では日本全国、私が訪れたことのない町、村は殆どない程だ。

私たちの最新研究で、認知症の大部分は「心の生活習慣病」であることが明確になってきた。



街路樹はおろか、プランターも植木鉢も見えない通り（東京・日本橋）

セカセカと仕事に追われ、音楽の素晴らしさにも、名画にも感動する時間を持たない人は、心の豊かさがなく、周りの人に対する思いやり、気配りも少なくなるようだ。

そのような感性の乏しい人が、仕事が一段落した頃に起こすのが認知症なのだ。

認知症患者が少ないまちには

この際、へ花・感性・ボケという相関関係を想定して欲しい。

結論から言えば、花の多い町は、生活が比較的安定しており、そこには認知症患者も少ないという基本的傾向があることに気が付く。即ち、田舎町でも比較的生活が安定している地域では、家々の庭に必ず花がある。そうでない地域では花を見掛けない。

大都会東京は公園が日本一多いらしい。

しかし、商店が建ち並ぶ地域、あるいは高層建築群の集まる地域には緑も花も少ないようだ。

かつて花博が開催された大阪地方はどうだろうか。工場、市場の密集地では、探しても花に目にかかることは滅多にない。花を植える空間が極端に少ないという物理的な問題が大きく立ちわだかまっているのだろうが、それだけではないように思える。

たとえ僅かの空間であっても、「あそこに花があればいい」と思えば、小さなプランターに花の種を蒔いたり、苗を植えたりするだろう。昼休み時間に花を眺めてホッとすると、心の安まる時間になるのではないか。

近年、東京をはじめ各地で「花のある町づくり」運動が展開されていると聞く。緑の大切さ、花々が人の心にもたらしてくれる豊かさを、市政に携わる人も住民も気付き、一斉に取り組むようになったのは嬉しいことだ。

私が住む浜松市には幸い、まだ田園色が残っていることもあり、町々のそこかしこに花がある。朝の散歩の途中、家々の庭に植えられた花を眺めさせてもらうのは楽しいものだ。

花の好きな人たちは最近、好んで横文字の名のつく花々を植えることが多いようだ。

ポーチュラカ、バーベナ、インパチエンス、サルビア、メランポジウムなどなど。色彩も多彩で、形も美しい。園芸店には、その種の苗が盛り沢山に並べてある。

ところが、ボケの患者さんを観察していると、

このような横文字の花の名前に馴染みがなく、知らない人が多い。そうしたことが分かってきた。

花はその人の感性のレベルを端的に表すバロメーターなのだろう。

花が多いか、少ないかは同じ町の中でも地域差が大きく、個人差はさらに大きい。つまり、そこに住む人々の感性の差のように思えるのだが、どうだろうか。

私個人の感覚に過ぎないかもしれないが、以下のような見方をしている。

—— たとえば、豪壮な大邸宅であっても、そこは高い塀が巡らされていて、庭には高価そうな石や松の木はあっても、花が少ししか咲いていない所には感性の乏しい人が住んでいるようだ。逆に小さな家でも、家の周りに精一杯に花を植えて、よく手入れしている家には、心豊かな人が住んでいるようだ。

試しに赤十字の募金にでも回ってみれば、即座にその差が分かるだろう。

豪壮で淋しい庭の人は募金を渋るだろうし、貧しくとも心豊かに暮らしている人は快く募金に応じてくれるものだ——

いわゆる右脳が受け持つ感性には、他人に対する思いやり、協調性、献身的精神なども含まれている。

感性の乏しい人とは

私はボケの患者さんを診てきて（これは多分、私が初めて指摘したことと思うが）、ボケの大部分は生活習慣病型であり、感性の乏しい人に起こ



っているという事実が気付いた。

第二次世界大戦のしわ寄せを受けたこともあるかもしれない。高齢の患者には若い頃から仕事一辺倒の生活を続けてきていて、何の趣味にも遊びにも芸術にも関心を持たずに生きてきた人たちが多い。ある意味では国家の犠牲者とも言えよう。

囲碁・将棋はもとより、トランプ、麻雀、花札で遊んだことのない人。どんな楽器の合奏にも加わったことはないし、コーラスのハーモニーに感動したこともない。俳句を詠んだり、名画を堪能したりもしない。テニス、サッカー、野球にも熱中しない。

人生のすべては、いわゆる左脳が受け持つ計算と理屈だと割り切って生きてきた人は、勉強はよくでき、仕事も結構よくできて、社会的地位も高かっただろう。金儲けも上手だろう。

しかし、この種の生活習慣病型は、高級官僚や、会社の管理職、学校で言えば校長や教頭など、一見有能な人たちに、しばしば見受けられる。

最近では医師にも、弁護士にも、裁判官にも見受けられる。

細かに観察してみると、そうした人々は——臆せず言わせてもらうが——「欠陥人間」ではないかと思われる。

右脳の感性を磨いてこなかったために、笑顔に乏しく、ユーモア・冗談が言えない。

すべてに自己中心的で、周囲の人、家族にも思いやり、気配りが乏しい。

心からの生き甲斐を持たないので、親友もできにくい。暇があれば酒に溺れるくらいだ。

本当の恋も知らないで、獸的な性欲を露わにして、社会的に物議をかます人たちも、決まってこの種の感性欠如の人なのだ。家族や部下から敬愛されることなど望むべくもない。

定年になったりして、仕事という目標がなくなると、数年のうちに「特に何もしたいことがないし、どこにも行きたくない。誰とも会いたくない」というへ意欲欠如症候群に陥りやすいのも特徴だ。これは、まさに「ボケの扉」が開いた時なのだ。

無関心では「認識の脳」に入らず

そんな人が私の早期認知症外来に來られた場合、私はまず次のような質問をする。

「今、七月の後半ですね。この季節にはどんな花が咲いているでしょうか。六つ、七つ挙げてみて下さい。」

すると「花は苦手なんです。何でしょうね。スイセンかな。チューリップはどうか」などとピント外れの答を口にするのが、この種の人の特徴だ。

彼らは朝早く散歩に出ることもないから、そこらいつぱいに咲き乱れているムクゲの花にもサルスベリにも気付かない。ノウゼンカズラ、芙蓉、カンナなどの名も知らない。たとえ目に入っても、無関心に通り過ぎるだけなので「認識の脳」に入っていないのだ。

感性豊かな人なら、朝から爽やかに咲いた一輪の朝顔にウットリして、俳句の一つもひねってみたくなるだろう。カラー写真に撮ってみたい、絵に描いてみたくもなる。そうして留めた花の印象は

心の底に強く焼き付けられるのではないだろうか。その季節の花をどれくらい知っているか、知らないか——だけでも認知症に陥りやすい人の判定は容易につく。

一つの実例を挙げると、「春の沈丁花を知らない人の七〇％は七〇歳代前半でボケるだろう」という臨床統計が私のクリニックで生まれている。

この種の人には花だけでなく、ブドウの種類（巨砲やピオーネなど）も梨、林檎の種類も知らず、昆虫の名前も星の名前も知らないのが常だ。

感性が乏しい人の特徴は、若い頃から型に嵌ったこと、または命じられたことを忠実に繰り返すこととはできる。しかし好奇心、関心を持って、何かにチャレンジし、探求を続けることができないことだ。

脳の構造はこうなっている

感性とは一般に、美しいものにどれくらい感動できるかという感受性のように受け取られているようだ。

しかし、この感性の受け持つ範囲は想像以上に広く、人生のあらゆる場面にその優劣が試されることになる。この世では、学歴とか社会的地位などという左脳の評価とは無関係に、感性の優れた人とそうでない人がいることはお分かりだろう。

会社のトップにいるワンマン社長でも、「右脳の」に評価すると最低レベルの獸のような人間であることは稀ではない。そうした人はいつ、どんな悪辣なことをしかずか分からないという予感めいたものを周囲の人は感じている。



マンションと道路との間の狭いスペースをフルに使った花壇。どんな人が手入れをしているのだろうか(東京・駒込の住宅地で)

その状況を、脳の機能と構造から分析すると次のようになるだろう。

大脳の後半部には外界からの様々な情報を受け取る(つまり、コンピュータで言えばインプットの役目)領域がある。その左半球は、言葉や数字などのデジタル情報を受け入れて処理するように、また右半球は音、光、色彩、方向感覚、感情などのアナログ情報を取り込んで処理するように作られている。

左半球が勉強、仕事に必須の知性の領域に相当するし、右半球は趣味、芸術、スポーツ、情緒などに必須である感性の領域(これが「情」に相当)だ。個々の作業の際の脳の活動を細かに観察してみると、あらゆる作業に左と右の半球が互いに協力し合い助け合って活動していることが判明している(ここでは分かり易いように「オリジナルにはこちらの半球を使う」という意味に解釈して欲しい)。

さらに、大脳の前半部にある領域のうち、先端部(つまり額の直下にある)が前頭前野、その後方が運動領域だ。

前頭前野は両半球後半部からの情報を連絡繊維で受け入れ、それに基づいて感動し、分析し、総合判断し、その状況に対して必要な決断を下し、その指令を運動領域(アウトプット)に伝える。

そこで実際の対応(モーション)がなされるが、その実行具合を追跡し確認するのも前頭前野の役割である。だから、ここ前頭前野は脳の総司令部だと言われている。

言い換えれば、個性差に基づいて決断し、発動される意思の領域(知・情・意の最後の意の場所)とも言えるだろう。この最高次中枢が衰えると結果的に脳全体の活動が不活発になり痴呆(認知症)へと移行するのである。

総体的に見れば、人は知性と感性のバランスが取れ、それを統括する意志(または英知の中枢とも言える)が優れていて、初めて人として立派な機能が発揮できることになる。これが古来、「文武両道」あるいは「よく学び、よく遊べ」と言われてきた所以だろう。

知性が欠如したのでは、良い仕事をするための技術を習得することができない。感性が乏しいと理屈以外の感覚的、ヒラメキ的、情緒的な面が欠如し、心豊かな人生を生きることが無理だろう。それを統括しているのが総司令部である前頭前野なのである。

感性は多分、十五歳前後までに習得できないと門が閉ざされ、その後の人生を心貧しく生きない

ればならないという厳しい原則があるので厄介だ。

子どもの感性を育むには

花はとにかく理屈抜きに美しい。

子どもの感性を育むためには母親が花を育て、その美しさの感動を子どもたちと分かち合うこと。一緒に楽しみながら、子どもたちにも花の手入れをさせることから始まるだろう。そんなふうにして育てられた子どもは、よその家や学校で、美しい花をむしろ見るようなことは決してしないだろうし、犬や猫を虐めることもしないだろう。

町の人々を心豊かにするには、町を花でいっぱいにして、絶えず美しい音楽を流すことだ。

この三十年間、私たちは浜松を花と音楽のある町にしようと、様々な努力を積み重ねてきた。

市内の高校生たちはもう十数年間、町並みに花の植木鉢を吊し、手入れを続けている。また中学、高校、大学、さらには実業団などのブラスバンドやオーケストラのメンバー達が交代で、駅前広場での演奏会をボランティアで続けている。

市内での演奏会も以前に比べ格段に増え、レベルアップしてきている。

新幹線の駅頭に優雅なクラシック音楽が流れ続けているのは浜松だけではなからうか。それらが知らず知らずのうちにどれほど、市民の心を豊かにしてくれたか計り知れない。

わが国は四季の変化に富み、本来、緑と水に恵まれた国だ。心を豊かにする教育が花のある町を作り、花がさらに人々の感性を磨いてくれることだろう。



「花」のまちづくり
「花のまち」づくり

3

宮崎県（フラワーフェスタの老舗県）

不滅の県民財産が出来上がるまで



元・宮崎産業経営大学教授（観光学）

● 渡辺綱纈

日本の観光産業史に残る偉人・岩切章太郎により始められた宮崎県の「花のまちづくり」。その一つの形態である「フラワーフェスタ」が来年以降も続行されるかどうかは不明だが、この間に培われた「花を育て、花を愛でる心」は、宮崎県民の不滅の財産だ。

（日本中の新婚客の4割弱を集めた

一九九二年、宮崎県で全国高校総体が開かれたときのことだ。あるマスコミが選手を対象に「宮崎の印象」についてアンケートした。答は「花と緑が美しい」「南国的な花の彩りがきれい」など、花を讃えたものが八〇%以上を占めた。季節は夏の盛り、全県を挙げての花の歓迎が若人たちの印象に強烈に映ったのだろう。

国体など大きな催しがあると、どここの県でも道路が整備され、沿道に花や緑が植えられ、町中にもフラワーポットが並べられる。ところが、イベントが終わると、殺風景な景色に戻ってしまう。

しかし宮崎県は違う。戦前から「花の宮崎」のために、官民一体となって努力してきた歴史がある。「花の宮崎」を唱えたのは「宮崎県観光の父」と今も慕われている岩切章太郎（宮崎交通株の創立者、一九八五年没）だ。

岩切は一九三一年に定期観光バス事業を始めた。全国の「はしり」だった。当時のキャッチフレーズは「神話と伝説の国」。日向乙女の名調子ガイドとサービスは、たちまち全国で有名になった。

しかし、神話と伝説や、観光バスガイドの人氣だけで、県外からの観光客を呼ぶことは、まだまだ無理だった。

岩切は、全国の有名観光地のデータを集めて研究した。意外なことが分かった。よその有名観光地にはすべてある物が、宮崎にだけはなかった。温泉だった。

宮崎県は海岸線こそ美しいが温泉がない。温泉に匹敵する目玉を作らなければ観光客は呼べない。岩切は寝ても覚めても考えた。そして目を付けたのが、日南海岸の名勝「青島」に、繁茂している亜熱帯植物のビロー樹だった。これを海岸線、駅前、公園、街路と至る所に植えたら、南国情緒豊かな景観が出来上がる。温泉がなくても、「南

国宮崎」のキャッチフレーズで売り出せる。

ところが、ビロー樹は成長が遅い。岩切は焦った。その時、県の農業試験場で不思議な木を見つけた。真っ直ぐに伸びていて、木のてっぺんから鳥の尾羽根のように美しい青々とした葉を八方に広げる。まさに南国イメージの樹木だった。

それはカナリー諸島原産の「フェニックス（不死鳥）」で、十年で立派な並木になる。岩切はビロー樹からフェニックスに方針を変更した。アメリカから種子を輸入し、フェニックスの苗を育ててもらい、日南海岸に次々に植栽した。

岩切は、フェニックスは日南海岸の縁であると言った。並木とは、旅人に木陰を提供するものだった。しかし今は、自然の景観を引き立てるための縁の役目を果たしている。バスの車窓に次々に展開するフェニックスの並木は、ロードパーク日南海岸の「動く縁」だ。

「大地に絵をかく」が岩切の夢とロマンだった。岩切の「南国宮崎」の発想は、戦後、日南海岸を世に売り出し、六〇年代から七〇年代の終盤にかけて、宮崎は「新婚旅行のメッカ」となった。

当時の厚生省資料によると、七四年の全国婚姻数は百万四十五組。宮崎市観光課の統計では、同年に宮崎市に宿泊した新婚組数は三十七万八千四組。全国の新婚カップルの実に三七%が宮崎市に宿泊したのだ。

（68年、「日本いちばんの春」で

岩切は、「南国宮崎」から「花の宮崎」を目指した。春から夏にかけては、ハマユウ、カンナ、



サンゴシドウ、キョウチクトウ、アメリカカンデイゴ、ブルーゲンピリア、ヒメノオゼン、ペチュニアなどの花々を日南海岸周辺に咲かせた。

秋には、十万本のコバノセンナの黄色い花が咲き「黄金海岸」となった。冬は花が少ないので、クリスマスの花ポインセチアを植えて、海辺を赤く彩った。

霧島山麓の生駒高原は、春は菜の花、秋はコスモスの大群落を作った。こうして、「花の宮崎」は、県内各地に広がっていった。

県も市町村も立ち上がった。宮崎県の素晴らしさは、「観光」でも「町づくり」でも、官と民の間に垣根がないことだ。良いアイデアがあれば、いつでも即実行できる素地が築かれている。

県は六八年、「日本いちばんの春」のキャッチフレーズを掲げて、県公園協会の主催により宮崎市平和台公園で「みやざきフラワーショー」を開催した。毎年三十万人近くの入場者があったが、公園の敷地が狭く限界だったので、八三年からは会場を県総合運動公園に移した。花の展示だけでなく、花にちなんだイベントにも取り組んだ。ミニSLや花馬車を運行し、花の女王も選出した。

（県内全市町村参加のイベントに

その年からは、やむなく入場料を取ることとし、百円の入場券を発売した。ところが入場者は増えて三十万人を突破し、県外からも六万五千人が訪れた。

翌八四年には四十万人を超え、県外客も八万人に達した。展示する花も四十六種四十万本となり、

広い運動公園も狭く感じられるようになった。

八八年には運動公園だけでなく、宮崎市内六カ所に会場を広げ、会期も十二日間に延長し、入場料も三百円に値上げした。名称も「みやざきフラワーフェスタ」に改められた。

九一年には宣伝隊が東京に進出し「宮崎発春一番」の大キャンペーンを展開した。

九二年は、高校総体の開かれる年ということもあり、花の数も六十五種、五十五万本となった。入場料は五百円に値上げされたが、県外の入場者が初めて十万人を突破した。

九五年には会場を「こどものくに」に移した。そこは岩切章太郎が最も情熱を注いだ遊園地で、南国の花と木を配して「三百六十五日花のあるまち宮崎」のモデルとした地だ。山茶花、椿、緋寒桜、バラ、ハマユウ、ハイビスカス、熱帯睡蓮、トキワサンザシなどが咲き、冬には赤い実のなる植物を集めたルビー園が好評だった。

この会場移転を記念して、「花づくり観光コンクール」を開始したところ、県内全市町村が参加して、その会場数は百二十二カ所に達した。まさに国内最多の花の祭典となった。

航空各社、宮崎カーフェリーや県内のリゾートホテルが全社協力し、ペア航空券やペア宿泊券を抽選で提供して、入場者に「ほほえみ花の国みやざき賞」の楽しみをプレゼントした。県物産振興センターも宮崎県の特産品をいろいろと贈った。

九九年からは会期を七十九日間に延長、メイン会場（こどものくに）の運営はすべて宮崎交通に移管した。

二〇〇一年、花の種類は八十種に増え、本数も百万本に達した。

（花がきれいに見えるよう

みやざきフラワーフェスタも、今年で四十回目を終った。観光宮崎のシンボル行事として、行政も民間も様々なアイデアを練り、毎年春一番の催しを心待ちし、盛り上げてきた。

だが、東国原英夫知事の誕生により、宮崎の観光も大きく見直されつつある。

フラワーフェスタを続行するのか、全く一新するのか——今、真剣に検討されている。

しかし、どのような形になろうと、フラワーフェスタ四十年の貢献は、いささかも変わらない。全市町村の参加で、「花のまちづくり」の意義も県民の一人一人に強く認識されてきた。

私はフラワーフェスタについては、続行賛成者の一人だが、ただ一言物申すならば、定規で線を引いたような花々の展示の仕方には、いささか不満がある。

岩切章太郎が目指した「花の宮崎」は、昔からその土地にあった花を基本にして、その町に似合う花を探すことだった。「切り出し」「植え足し」という手法がそれだ。だから、岩切が植えた花や木は、どこから眺めても自然の風景だった。

章太郎の次男で、宮崎交通元社長の岩切達郎氏は「近頃の花は、予算が植えてある」という感じがしてならない」と語る。そして、「花のまちづくりとは、花がきれいに見えるまちづくりでなければ」と説く。至言であると思う。



4年前は「生産だけ」のまちだったが

そもそも「切り花」生産で有名なまちだった。が、切り花はハウスで育て、蕾のうちに出荷する。で、市民の間からは「どこが花のまちなの？」。

そこで「花づくりだけのまち」から「花があふれるまち」にしようと方針を定めてから僅か4年。今や深谷市は「市民ボランティア主導の花のあふれるまち」のスーパーモデル市になった。他市町村の参考になる施策を中心に紹介してもらった。

（人）と人を繋ぐ力が

「深谷って知ってる」「深谷ネギの産地？でも、どこ」——深谷ネギを知ってもらっているだけで嬉しいが、全国的には決して知られた市ではない。しかし、ネギなど野菜の収穫量は全国有数であり、さらに花の産地としても全国トップレベルにある。特に、ユリやチューリップの切り花生産が盛んだ。

それまでも「花のまち深谷」として地道ながらPR活動は続けていたが、単に花の生産者が多く、出荷量が多いまちということだった。

そこで、市の特産品「花」を活かした施策をできないかと、二〇〇三年に若手職員を中心としたプロジェクトチームを作り、調査研究を進めた。同時に、花をキーワードにまちづくりを実施している市町村で構成している「ガーデンングサミッ

ト連絡協議会」に参加し、他市町村の取り組み状況を学んだ。

ガーデンングによるまちづくりの研究を進める中で「花」の魅力は様々で、美しいだけでなく、人々の心と心を繋ぐ不思議な魅力があることに気付かされた。単なる花いっぱい運動ではなく、真のまちづくりの手段として「花」の持つ魅力を十分に活用していこうということになった。

（行政はバックアップに徹して

綺麗に咲いている花を見て不愉快になる人はいないだろう、それならば、まちを花でいっぱいにしよう。でも、お金をかけて花いっぱいにしても、それで人々の心が繋がるだろうか。これからのまちづくりとは、市民参加というよりも、市民がまちをつくり上げる——市民が主役でなければ本当のまちづくりにはならない。



深谷市ガーデンシティふかや推進室長

● 吉田二郎

心が繋がらなければ住み良いまちとは言えない。そのためには、行政の手伝いとしての市民参加ではなく、市民が自分たちのためのまちづくりに自ら参加し、行政はバックアップに留まること大切という結論に達した。

行政は、市民が動きやすいようにきつかけをつくる。市民が活動しやすいよう支援もする。もちろん行政が得意な分野は行政が行うが、お互いの分担をしっかりと定めておくことが大切だ。

このような考えの下、プロジェクトチームは、深谷市全体が庭のようになればよいと、「ガーデンシティふかや構想」をまとめた。

構想は、その実現に向けて三つのキーワードを掲げた。

①「愛する」花を愛し、緑を愛し、そして深谷市を愛する心を育む。花や緑に関心を持ってもらえるような施策を展開する。

②「創る」「美しくなければ街ではない」をモットーに、花と緑のあふれる街を創る、花や緑が楽しめる街を市民とともに創りあげる。

③「育む」現存する自然緑地や生産緑地を守り育み、自然と共存するまちづくりを推進する。



(上) 個人の庭を開放したオープンガーデンではホスト役と来訪者の話が弾む (下) 活躍するガーデニングボランティア

花や緑、農地等の保全・活用を進める。

そして、具体的な施策展開としては、ガーデニング教室の開催、オープンガーデンの推進、ガーデニングボランティアの育成、公共用地の里親制度（アダプト）の推進、学校花いっぱい運動の推進などを掲げた。

この構想を推進する部署「ガーデンシティふかや推進室」（以下、推進室）は〇四年二月に総合政策部に設けられた。事務室は市民が気軽に入る場所がいいということで、市役所内ではなく、コミュニティセンター内に設置した。

（一）声掛けたら1月後に22軒が

しかし、一口に「市民と共に」「市民主体の」と言っても、簡単にいくものではない。机に向かって考えていても始まらない。まずは、こちらから市民のもとに出掛けて話を聞くことにした。庭

が綺麗なことで近所で有名なお宅を数軒訪ねて、ガーデンシティづくりを始めることを説明しながら意見を聴いた。

特に関心を持ってもらえたのは「オープンガーデン」だった。それも「これならすぐにできそうだ」ということで、それぞれが花の友達に話したところ、推進室が声を掛けてから一カ月足らずで第一回のオープンガーデンを開催してしまった。

それも一挙に二十二軒もオープンするというので、市民パワーに驚かされた。マスコミに取り上げられたこともあり、来訪者が二千人を超える大盛況だった。

開催に当たっては、会の名前を「深谷オープンガーデン花仲間」とし、オープンガーデンは主催でなく「花仲間」主催とし、独自に活動が展開できる態勢とした。

もちろん、市からの補助金などはなし、すべてボランティア活動だ。「オープンガーデン」は、花というキーワードで人々に会話が生まれ、人と人を繋げていく力がある。近所はもちろん、そこを訪れた人々までガーデニングという共通の話題で繋がっていく。

「個人の庭も街の景色の一部」として始めたオープンガーデンは現在、会員が八十人を超え、庭を公開する家も六十八軒に増えた。植栽帯や公共用地にも花を植える活動に広がりを見せ、「ガーデン

シティふかやづくりの推進役」となっている。

これらの活動が認められ、埼玉県「彩の国景観賞」では特別賞、「花いっぱい咲いたまフラワールコンテスト」に入賞、さらに第十六回全国花のまちづくりコンクールでは、団体部門で最高の賞である花のまちづくり大賞（国土交通大臣賞）を受賞した。

（二）ボランティアに講習・交流の配慮

公共用地のガーデニングについては、市民ガーデニングボランティア制度を創設した。

市にガーデニングボランティアとして登録すると、推進室が直接管理している公共用地のガーデニングスケジュールが配られる。その日程を見て、自分が出られる日時・場所に参加すればいい。気軽な活動だ。

推進室にとっては、当日現地に行ってみないと何人参加するか分からないが、参加人数に応じて作業すればいい。登録者は百五十人ほどだが、平均すると二十人程度の参加がある。

作業だけでなく、ボランティア対象の講習会やガーデン視察なども計画し、会員の技術向上はもちろん、親睦や交流にも配慮し、楽しく作業ができるよう工夫している。

ボランティアが管理しているJR深谷駅前のステーションガーデンは市民に大好評で、今では駅舎と共に深谷市の顔になっている。

この事業も補助など一切ない完全無償のボランティア活動だ。

公共用地を里親に出す「アダプト制度」の活動



も広がっている。現在十八団体が登録し、地元にある公園や道路脇の空き地などで、清掃活動や花の管理などを行っている。すべてがガーデニングではなく、清掃活動のみの団体もある。

基本的には、市は土地を貸し出すだけで資金的な補助は一切なしだが、軍手やゴミ袋などの消耗品は必要に応じ供給している。また、広範囲のガーデニングを行う場合、苗や肥料などはケースバイケースで対応している。

この制度への参加は当初、市民からの申し出を待っているだけだったが、今は新たにできた道路脇の公共用地などで、花好きの周辺住民に呼び掛け、新たにアダプト団体を立ち上げ登録してもらう積極策も取っている。きっかけ作りから軌道に乗るまでは市が手伝うが、その後は独自に活動してもらう。



「ふかや花フェスタ」での花の競り即売会

「地域で子どもを育てる」の実践

小中学校でのガーデニングにも独自の方法で取り組んでいる。本来、学校の花壇などは教育委員会の管轄だが、推進室としては花を植えることだけが目的でなく、学校と地域を結ぶ手段としてガーデニングを捉えている。単なる花植え作業の手伝いではない。

「ふかや学校花はなプラン」と名付けた事業は、子どもはもちろん、先生、PTA、それに地域のガーデニングボランティアも加わって、皆で花を植えていく。

これにより学校と地域の人との交流が図れる。また、ガーデニング好きの人は庭にいる時間が長いから、家の前を通る子どもたちにも目を配ってくれる。防犯にも一役買ってもらっている。地域で子どもを育てる——それが学校花はなプランの本当の目的だ。

「今や観光資源としても

このような様々なガーデンシティづくりの市民活動の成果を多くの人に知ってもらうために開催しているのが、「ふかや花フェスタ」だ。

「深谷の春の風物詩」として関東一円からガーデニングファンが訪れるようになり、〇七年春には第四回を開催した。

「花仲間」主催の「オープンガーデンフェスタ」も同時に開催するほか、市内のガーデニング関連の植木市や花の展覧会、ガーデニングショーも協賛イベントとして開催するなど、年々広がりを見

せており、新たな観光資源としても成果を上げている。

花フェスタも他の事業と同様に市民の手によるイベントになるよう心掛けており、会場の花飾りはすべてガーデニングボランティアの手による。市民参加によるガーデニングコンテストの作品も会場に展示するなど、市民の活躍の場にもなっている。

また、市内のガーデニング関係の事業者にも展示用の花の協賛をいただくなど、官民一体の事業として取り組んでいる。

「植木鉢→庭→地域へ

花のまちづくりは、市民と行政が手を取り合って街を創ることで、協力して働く「協働」ではなく、市民と行政が共に何が出来るか、どうしたら皆が幸せになれるか協力し合い街を創りあげていく「協創」のまちづくりだ。

花は、人間関係が希薄になり殺伐となってしまう社会を、共に生きる人々同士が助け合う心を持った社会に変えることができる力を秘めている。

植木鉢の一輪の花を育てることから庭へ、そして地域に広がっていくガーデニング。それとともに花を育てる優しい気持ちが生まれ、種や苗を近所に分けることなどにより、人と人が優しい気持ちで繋がっていく。

花で心が繋がるまちづくりは、種をまき、やつと芽が出たところだ。この芽が大きく育ち大輪を咲かせ、また種を持ち次の世代にまで引き継げるようガーデンシティづくりを続けていきたい。

とっとり花回廊の「花の丘」
からは大山の雄姿が



地域づくりにも貢献する日本最大の花のテーマパーク ● とっとり花回廊 (p30)

「花」のまちづくり／「花のまち」づくり

とっとり花回廊が培養増殖に努めてきたササユリ



長い歴史を誇るみやざきフラワーフェスタ



フラワーフェスタが育んだ「花を愛でる心」 ● 宮崎県 (p18)

日本屈指の花の生産地 ● 愛知県 (p9)



愛知県と県花き連
が共同開発したキ
クの新品種「白粋」

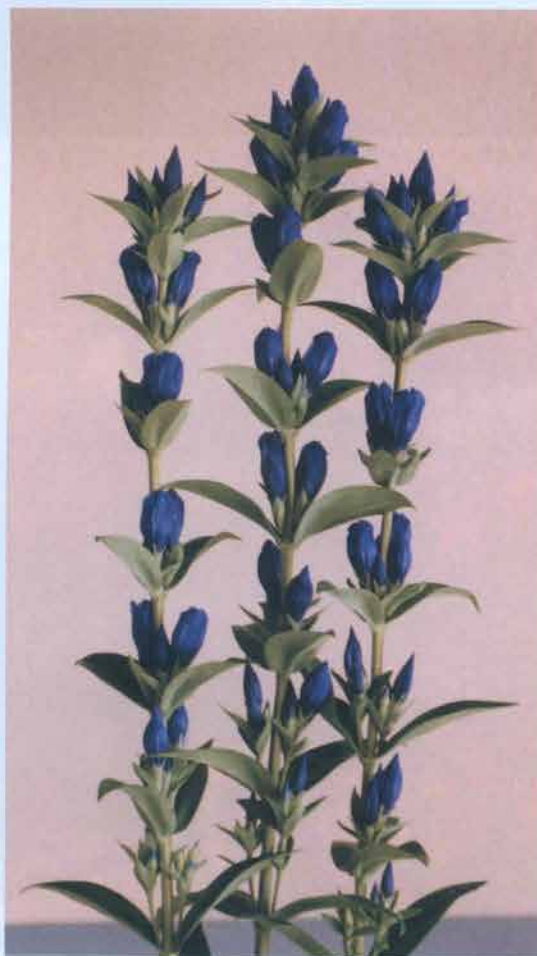


筆者は、定規で線を引いたような植え方に疑問を呈している



東京下町のフラワースポット ● 向島百花園 (p.40)

向島百花園が誇る萩のトンネル



「水田に花を植える」から始まって、全国1のりんどうの産地に
● 岩手県八幡平市 (p.12)

りんどうのまち・安代町（現・八幡平市）で開発されたオリジナル品種「安代の秋」
（あいのあき）



向島百花園から宮中に献上する「春の七草籠」

「花いっぱい運動」発祥の地 ● 長野県松本市 (p.28)

花いっぱい運動の発祥の地で、花を植える小学生たち





花博跡地の浜名湖ガーデンパークに咲くチューリップとラッパスイセン

心のオアシスに成長した花博跡地
● 浜名湖ガーデンパーク (p36)

モネの庭の一隅



花のアーチ

「都心に人が住めるようにしよう」を合言葉にした総合的な定住人口回復施策が着実に成果を挙げ、いま、人が中央区へ中央区へと移り住みつづいています。

おかげで、まちには活気と賑わいがみなぎってきました。

二〇〇五年の国勢調査によると、東京都中央区の人口は五年間に三五・七％も伸びました。三〇％以上も伸びた自治体は他にありませんから文句なしに全国一の人口増です。

そうした勢いにより、長い間の目標だった「人口十萬」をついに昨年四月四日に達成しました。その後も一日八人、月二百四十人の割合で増加しており、年間出生数も七年前までは五百人台だったのが、昨年は一千人を突破しました。

日本全体が人口減少時代に入った中で、本区の人口や出生数が増えるのは大変意義のあることです。

とはいっても、一朝一夕にして今日のような人口増になったわけではありません。振り返れば、長い長い道のりでした。

本区の人口は一九五三年の十七万二千八百八十三人をピークに、減少に転じました。人口減により、本区の活力の源泉であり生命線である賑わいをはじめ、様々な面にかげりが生

じました。歴史ある小中学校が統廃合を強いられたり、伝統を誇るコミュニティ活動にも支障が出ました。

そうした最中の八七年四月、区長に就任した私は直ちに「人口回復」を宣言しました。当時はバブル経済の絶頂期。まちにはオフィス需要をあてにして土地を買い漁る地上げや

業務地化は、経済効率第一主義的発想ではありますが、いかに誤りであったかは、その後の「失われた十年」といわれる不況の時代を見れば明らかです。

人がいなくなれば肝心の経済活動が低迷し景気も落ち込むのです。さらに住機能が外へ外へと押しや

れる仕組みは、

「職住近接によるゆとりある生活」からほど遠く、結局は経済性も人間性をも阻害してしまつたのです。

何としても業務と居住性とのバランスの取れた秩序を取り戻さなければならぬ。そうした

思いから八八年

を「人口回復元年」と位置付け、一月一日に「定住人口回復対策本部」を設置し全力で取り組みました。

区立住宅など公共住宅の大量供給に努め、民間開発には住宅を造りやすいインセンティブ導入に力を入れました。

しかし、人口減は相変わらず続き、

しかも世間は冷たいものでした。

「なぜ都心に人が住まなければならないのか。都心は業務、人は郊外でいいではないか」「都心居住とか人口回復などと言うのは、自治体が生き延びるための保身にすぎない」といった意見は大学教授クラスの識者や専門家からも出たのです。「必ず失敗する」とも言われました。

半面、味方もいました。力強い励ましの声が各方面から数限りなく寄せられました。何よりも区民、議会、職員的一致団結は強固でした。この間、人口は九七年四月に七万一千八百六人と過去最低を記録し、大ショックを受けました。

潮目が変わつたのは九八年一月一日でした。この日の人口が前年に比べ二百九十七人上回ったのです。人口が前年より増加したのは何と四十五年ぶり。「人口回復」を宣言してからちょうど十年たっていました。

以来、人口は毎年伸びつつあります。特に様々な方々に誇りと喜びを持って住んでいただいております、そのことがまちの活力、さらには景気拡大にも大いに貢献しているのです。

次なる目標は、区民が生活の豊かさを実感できる気品と風格、知性あふれる日本一の「光り輝く中央区」の実現です。

首長の挑戦

今や人口伸び率日本1に

東京都中央区長 ● 矢田美英



底地買いが横行し、人口減に一段と拍車を掛けていました。

本区は「都心中の都心」であり、「世界の中の日本」として平和と経済を中心に国際貢献する原動力となつていくのですから、業務地化が優先するのは当然です。

しかし、居住性を無視した極端な



「花いっぱい運動」の始まりと今後

松本市建設部公園緑地課

● 小岩井 淳

「花いっぱい運動」が始まったのは、戦後間もない長野県松本市のことだった。以来五十年。「花を媒介とした心の運動」であることを確認して、社会をきれいで住みやすくするための一歩を改めて踏み出した。

（庭ではなく、皆が見える所に

「ある日、わたくしはふと荒れはてた町に、美しい花がいっぱい咲いているようすをゆめにえがいてみました。わたくしの住んでいる、日本アルプスのふもと、松本の街を花でうめようと考え、わたくしの胸は少年のようにおどりました。『そうだ、花を街にうえることが世の中を明るくする一ばんよいことだ』と強く感じたのです」——花いっぱい運動の創始者である小松一三夢先生は、その著『花いっぱい』に、こう書いている。

小松先生は戦後、松本市立旭町小学校に勤めていた頃、病に倒れ一時は危篤状態に陥った。一命を取り止めたものの、三年間の闘病生活に入った。闘病中のある日の夕暮れ、松本市内の女鳥羽川（めとば）の河畔に立った。川の両岸に色とりどりの花が咲き、蝶が舞い、小鳥が飛び交う幻想を見たという。

この時に「街に花を咲かせよう、そして人びとのすきんだ気持ちをやわらげ、街を美しい花でいっぱいになれば、もっと美しい、明るい、住みよ

い社会ができるに違いないとひらめいた」と、後に語っている。

病が癒えて復職すると、小松先生は小学校の空き地に黙々と花の種子をまき、苗を植えた。

日本人は古来、草花や木を自分の庭に植えて楽しんできた。けれども、それは自分だけであって、社会との連帯はない。皆が見える所へ出して、皆で育てよう——と、父兄や子どもたちに語り掛け、それぞれの家の前や空き地、土手などでの花づくりを進めようとした。徐々に耳を傾ける人が増え、二十人ほどになった。

（ゆとりのない時代だったが

一九五二年（昭和二十七年）四月八日、松本市六九町の食堂に小松先生ら同士七、八人が集まった。期せずして花まつりの日だった。会の名称を「街を花いっぱいにする会」と決定し、事実上このときに会が誕生した。組織面では、その後に松本市や町内会、PTAなどの参加があつて動き出す。

市と市内の篤志家から花の種七千袋の寄付を受

け、各町内会を通じて各家庭に配布したことが、幸先の良いスタートとなった。会は花いっぱい運動の趣旨をガリ版刷りにして配ったが、一部には「腹いっぱいのかではいいのか」と皮肉っぽい声も上がった。

まだまだ戦後の混乱期、市民の暮らし向きは楽ではなく、心を花へ向けるゆとりが少なかつたが、松本市の町会連合会の一致協力もあつて、運動は徐々に伸びていった。

小松先生は一貫して、個人的、家庭的な楽しみのための花作りを、集団の大きな交歓の場として広げ、花壇を街頭へ出すことを説いて回った。

（今なら「社会常識」も実は

一九五五年頃から、花いっぱい運動は県外各地に広がり、その花の輪の連絡を図って、運動をさらに広げようと、「第一回花いっぱい運動全国大会」が松本市で開催された。

大会には、全国各地から「花の会」の代表六十余人と長野県内、松本市内からの参加者を合わせ、約三百人が参加した。参加者は、松本の特色ある花壇のスライドを見たり、市内の花いっぱいの様子を見て回ったり懇親を深めた。こうして運動の輪は、着実に全国へと広がりをみせていった。

松本市内を流れる川は、かつてカジカが鳴く清流だったが、六三年にはごみ捨て場のようになっていた。

そこで、街を花いっぱいにする会は、市民に呼び掛け、各町会、婦人会、青年団、商店街、ロータリークラブなどの協力を得て、川の浄化運動を



花を植える小学生

始めた。花いっぱい運動に共感する人々が多くなり、単なる花を植える運動としてではなく、環境を美しくする運動も進められた。

六五年には、全日本花いっぱい連盟が、全国高校野球大会の会場に、紙くず類をちらかさない運動を要請した。例えば「紙くず類をちらかさないように場内放送で呼び掛ける」「会場に、ごみ箱を備える」「会場に美化係員を置く」など。

今では当たり前のことだが、実はこの時の呼び掛けによって運動が全国に広がり「当たり前のこと」になったのだ。

こうして、花いっぱい運動は、河川をきれいに

したり、ごみを散らかさないようにするといった社会をきれいにする運動として、今日まで広がりを見せるまでとなった。

（オーブンガーデンの意味

松本市は現在、町会や商店街など地域住民が主体的に花植えや、水くれといった管理をしているところへ花苗を支給している。花を単に植えるのではなく、花を植えることによって、住民同士のコミュニケーションが図られるほか、きれいな街づくりにも繋がる。

また、近年のガーデニングブームに乗じ、専門家が手掛けたものだけでなく、個人で庭づくりを楽しむ人々が増えてきている。

そこで、市民が丹精込めて育てている庭を公開し、多くの人に見てもらい、一緒に楽しみながら情報交換を行うことが、花いっぱい運動の一層の推進と緑化の輪の拡大に繋がっていくと考えて、〇四年度からオーブンガーデン事業を実施している。

この事業は、まさに小松先生が提唱した「個人的、家庭的な楽しみのための花作りを集団の大きな交歓の場として広げ、花壇を街頭へ出す」ことの線上にある。

このほか、中心市街地にある花時計公園で、直径一メートルの丸いワイヤーバスケットに、自由に花を植え込むフラワーコンテストを〇三年から実施している。このコンテストは、ガーデニング愛好者に作品発表の場を提供するとともに街並みを彩り、公園に訪れる市民や観光客の心を癒し、

大変好評を得ている。

個人や企業、町会などを対象とした「花壇コンクール」や、子どもから年配の方まで手軽に花に親しめる「押し花はがきコンクール」などを実施している。

（花を媒介とした心の運動として

今年六月二十三日に「第五十回全日本花いっぱい松本大会（第六回世界大会）」が開催された。大会は、花いっぱい運動が「花を媒介とした心の運動」であることを確認して、花いっぱい運動を通じて心の健康づくり、花いっぱい運動を次世代を担う子ども達に繋げていくことを目的に開催された。

大会に向けて、中心市街地を花飾りの重点地区と位置付け、松本らしさを出すため、なるべくプラスチック製のプランターを使わずに地元の間伐材を利用したプランターや白樺や流木を使って花壇を作るなど、それぞれの通りに合った花飾りを地元町会、商店街、ボランティア、小中学校の児童、生徒など市民参加によって行われた。

この節目の大会は、花いっぱい運動の原点を振り返る上で、とても良い機会になった。

これを機に、小松先生の願いでもある社会を美しく、明るく、住みよくする運動が、今後さらに発展するため、市民と行政が一緒になって今後も花いっぱい運動を積極的に進めていきたい。

へ参考・引用文献

『花いっぱい』（街を花いっぱいにする会発足五十周年記念事業実行委員会 二〇〇二年九月）



「花」のまちづくり／
「花のまち」づくり

6

鳥取県とっとり花回廊

観光・生産に地域づくりにも



(財)鳥取県観光事業団
とっとり花回廊園長

● 木村康志

「とっとり花回廊」は、日本最大規模の花のテーマパークだが、実は園内を見せる観光資源であるだけではない。周辺の産業としての花卉生産を促進するとともに、一般県民や周辺小学校に花の栽培を指導し、温泉地の飾花事業にも協力している。

とっとり花回廊は今年で開園八周年を迎えた花のテーマパークだ。

一九九〇年度の第六次鳥取県総合計画にフラワーパークの建設が盛り込まれ、九一年度から基本構想の策定に着手、建設地の調査、決定、並びに設計を行い、九五年度から建設に着手し、九九年三月に竣工した。

設置目的として①県民に花と緑あふれる「憩いの場」の提供②「全県公園化構想」推進の拠点施設③鳥取県の観光及び花卉園芸の振興——を挙げ、観光立県鳥取県のシンボルになることを目指して九九年四月にオープンした。

整備コンセプトとして、花や植物をいろいろな距離や角度、あるいは季節や時間の経過といった視点で眺めたり、観察できるようにし、多くの方がいつでも花や緑と触れ合い楽しむことができる庭園を目指した。具体的には次のような整備がなされた。

一、一周一キロの展望回廊により様々な眺望を創出する。

一、中国地方最高峰大山（標高一七〇九メートル）を借景に自然林、自然地形、山野草の活用による自然で潤いのある景色を創出する。

一、様々な庭園・花壇の配置により多様な演出を試みる。

一、大規模な温室（フラワードーム）により華やかさを演出し、通年性を確保する。

一、植え替え花壇、露地栽培植物の組み合わせによる季節感を演出する。

一、屋根付き回廊による雨天対応型にする。

一、福祉のまちづくり条例に準拠した施設造りによる弱者や障害者へ配慮する。

これにより、鳥取県が誇る秀峰大山の美しい姿を臨む絶好の景観の中、総面積五十ヘクタール、日本最大規模のスケールを誇る園内で数々の美しい風景、四季折々の草花を楽しんでもらえる。

（営業部門が旅行会社にあタック

鳥取県の観光といえば、鳥取砂丘、大山、皆生や三朝などの温泉がその代表だった。しかし、鳥取県西部の観光拠点施設として花回廊が開園すると、初年度百十五万人の入園者を記録した。八年を経過した現在でも年間約四十万人の入園者を迎えている。

開園当初から県営施設としては珍しく営業部門を持ち、旅行会社などへの積極的にあタックした。また、テレビCMなどを使った広報宣伝活動を展開して、広く県内外からの誘客に努めた。

それとともに県観光の拠点施設として近隣の宿泊施設、観光施設との連携の必要性を踏まえながら、鳥取西部、鳥根東部にまたがる大山中海圏域（なかつま）の観光関連施設との連携事業などにも加わり、地域観光の推進にも努めている。

入園者の入り込み方面としては、県内はもとより鳥根県東部、山陽、四国方面（一部近畿圏）の日帰り客を中心に、中京方面からのツアー客もある。年間を通して各地からの入園者を集めており、地域への集客に一役買っている。

（花苗の95%は県内産

「地域に愛されない植物園は、外からも愛されない」——地域と一体となり地域を取り込んでこそ、とっとり花回廊は成り立つ。地域にとつての植物園の位置付けをしっかりと考慮し、次のような試みが生まれた。

【花苗生産者との交流】とっとり花回廊は、地



域の花卉生産振興を目的の一つとして設立され、鳥取県内の花壇苗生産者から年間六十万株の花苗が供給されている。

これは、とっとり花回廊に植栽されている花苗の約九五%以上が鳥取県内で生産された花苗であることを意味する。花回廊は、こうした花苗の調達を通じて、鳥取県内の生産技術向上を目指している。

園内に植栽されている花々は、県内や県外へ向けた鳥取県の花卉生産をPRする展示品としても重視されている。

【ユリを通じた交流】とっとり花回廊のメインフラワーであるユリについては、その生産を地元と共にやっている。

園内や周辺に自生するササユリは、環境の変化や乱獲などにより個体数がかなり減少している。貴重な自生地を保護し、また地元バイオテクノロジーセンターへ培養技術指導を行い、長年に渡りササユリの培養増殖の方法を検討してきた。

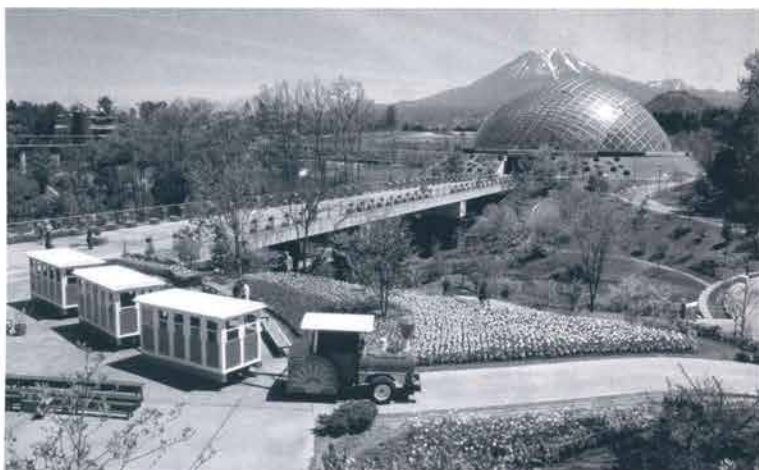
いよいよ今年から試作出荷が始まり、来年からは園内自生地への供給も展望している。そうなれば、地元のサ

サユリを地元で増やし、自生地に戻す試みが実現する。

こうした活動は、継続することに本当の意味がある。地元の皆さんと世界一のササユリ自生地を目指して躍進します。

【地域小学校との交流】植物を種から育てることは、当たり前なのだ。しかし近年は、ポット苗販売が進み、種に触れる機会が少なくなった。

種から植物を育てると、花が咲いた時の感動の大きさに驚かされる。「あんな小さな種から、こんなに大きな花が咲くなんて」と、大きな喜びがある。そして「種から一生懸命育てたのに、枯れてしまった」という大きな悲しみもある。



(上) とっとり花回廊の正面入り口 (下) チューリップの向こうはフラワードーム

こうした感情をもたらしてくれるからこそが「植物の力」だと思う。

とっとり花回廊では、子どもたちへ植物の素晴らしさ、そして土の美しさを教える「育種寺子屋の活動」を行っている。地域の小学校に出向き、交配や種蒔きを通して「世界に一つだけの花」を作る授業だ。

昨年度は三つの小学校の八十一人の子どもたちに「植物の力」を伝えた。世界に一つだけしかない花が生徒それぞれに開花し、八十一種類の個性的な花が咲きそろった。

子どもたちは、自分の花に名前をつけて我が子のように大切に育てている。この活動を通じて、子どもたちの心の中に、ワクワク・ドキドキの感動が生まれた時こそが、とっとり花回廊と地域が一つになった時といえる。

【学習・普及啓発活動】花卉に対する県民の理解を深めてもらうため、園芸教室、園芸講習会、園内ガイドツアーなどを開催して、バラやランなどの育て方の基本編から応用編まで、ハンギング、コンテナの教室、NHK趣味の園芸講師陣による講習会、季節毎の園内ガイドツアー、自然観察会等々を随時進めている。

また花を趣味とする団体との協力による展示会、講習会なども定期的に開催している。

このような園内での学習・啓発活動のほか、地域に対する活動として周辺集落や山陰屈指の温泉地である皆生温泉地区での飾花事業への指導協力など、地域づくりに向けた取り組みも活発に行っている。



「ならでは」活かしフラワーリズムの展開

四月から十月まで、雪のない期間に北海道が目指すのは「北海道ならではの」のファクターを総動員したフラワーリズムの推進だ。これは様々な産業の振興、まちづくりにも波及効果がある。

北海道の観光産業は①雄大な自然景観②新鮮な食材③豊富な温泉——という三つの大きな魅力に支えられて発展してきた。

しかし近年、ライフスタイルも変わり、国内外の競争がますます厳しくなっている。北海道ならではの新しい魅力を創り出し、北海道観光の幅を広げ、奥行きを深くしていくことが求められてきた。そうした中で、「花」は北海道の恵まれた自然環境、基幹産業である農業、観光関連産業の三つに共通するキーワードだ。「花」観光を推進することは、農業や観光関連産業といった既存産業の振興やまちづくりの推進に繋がり、地域経済の活性化にも大きく貢献できると期待されている。

北海道の花の魅力としては①ラベンダー、ひまわり、芝桜といったスケール感のある花畑が数多くある②本州と異なる環境のため北海道独特の野生の花がある③高い山へ登らなくても高山植物が鑑賞できる——などが挙げられる。

また、道内では花によるまちづくりや、個人の

ガーデニングが盛んで、それらが地域の観光資源となっている例もたくさんある。

（花の名勝地13カ所を選定

そこで北海道では二〇〇二年度に、官民を問わず、「花」に関する活動に携わる人々が積極的に情報を共有して連携を強化する目的で、「花大陸 Hokkaido」プロジェクトを立ち上げた。ここが中心になり、花をキーワードにした観光、花生産の振興、花のまちづくりなど様々な事業に取り組んでいる。

具体的な施策としては、〇三年三月に花のポータルサイト「花大陸 Hokkaido」を構築し、花観光スポット情報をはじめ北海道の花に関する様々な情報の発信を始めた。

また〇四年五月には、高橋はるみ北海道知事が「北海道フラワーリズム宣言」を発したのを受け、公募により四月から十月までの「北海道・今月の花」(表参照)を選定するとともに、道内各



北海道経済部観光のくにづくり推進局長

● 熱田洋子

地で花フォーラムを開催するなど、花に関わる人々の連携強化と、花を生活に取り入れる気運の醸成などに努めている。

〇五年度は、新たな花観光地を発掘するため、全道各地の隠れた「花の名勝地」として、十三カ所を公募に基づき選定した。

このうちニセコ町の場合は、JRニセコ駅の正面に位置し、カタクリ、エゾエンゴサク、キクザキイチゲの群生地がみられる「桜ヶ丘公園」や、色とりどりの花が飾られたメインストリート「綺羅街道」などを一つの地域として選定した。「花が人と人を結び、もてなすまちがある」が、このテーマだ。

また礼文町も、礼文島全体を一地域として選定した。本州では、二千メートル級、北海道でも千六百メートル以上の高山でしか見ることのできない高山植物が、この島では海岸付近にも咲くこと

今月の花（北海道）

4月	クロッカス	ミズバショウ
5月	チューリップ	シバザクラ
6月	ライラック	スズラン
7月	ラベンダー	ジャガイモ
8月	ヒマワリ	ハマナス
9月	コスモス	サンゴソウ
10月	キク	モミジ



(上) 礼文島のスケールの大きな花風景 (下) つつじヶ原のエゾイソツツジの群生

（JR、旅行各社とタッグで

○五、○六両年度にわたり、自治体とJRグル

から「花の浮島」と呼ばれている。レブンウスキソウ、レブンアツモリソウ、レブンソウなどの希少固有種をはじめ、約三百種もの高山植物が、春から夏の終わりにかけて、競うように咲き誇る。レブンウスキソウが海の香りのする低地に群生するのは珍しく、香深港のある市街地から香深井に抜ける約九キロのウオーキングルート「礼文林道コース」を歩いた人だけが見ることができるとの光景だ。

屈斜路湖を抱える弟子屈町のつつじヶ原、浜中町の霧多布湿原も選定されている。

つつじヶ原はエゾイソツツジが百ヘクタールにわたり群生する。川湯温泉から散策路が延びている。霧多布湿原はラムサール条約の登録湿原で、約三百五十種の草花が自生する。

ーブ・旅行会社などが一体となり、観光客を誘致するデスティネーションキャンペーンを「ひとりひとり」が、花のおもてなし『はなたび北海道』をキャッチフレーズに実施した。

コンセプトは、花を中心にした北海道の人・まちの新たな魅力づくりで、個人・企業・自治体が積極的に参加できるキャンペーンを展開することとし、「ひとりひとりが花のおもてなし」のテーマにふさわしく、北海道民ひとりひとりのホスピタリティ向上キャンペーンの役割を果たした。

○六年度のキャンペーン期間中は、JRの駅を花壇・フラワーポットなどで飾り、もてなしの気持ちで花で表す活動をしてくれるボランティアを一般募集し、「花の駅長さん」として、道内八カ所の駅で活動してもらった。

キャンペーンテーマの意思統一を目的に、イメージキャラクター「ハナタビちゃん」のバッジを作成し、関係者が胸に付けた。一般の人への販売

も好評だった。

道外への情報発信としては、全国のJRの主要駅と首都圏の電車内にポスターを掲示するとともに、「はなたび北海道」のホームページを開設し、TV・雑誌などで情報を発信した。花観光施設、花イベント会場と連携したスタンブラリーなど参加型企画も実施した。

各旅行会社も花をテーマにした旅行商品を開発した。JRの

割引キップの発売や、駅と花観光地を結ぶバスの運行など、関係者が連携し、様々な取り組みを実施したことが観光客の増加に繋がったと思われる。

（「ニューツーリズムと組み合わせ

「花」は今後も、北海道観光のブランドの一つだ。花による景観形成の推進に加え、北海道ならではの魅力的な資源である「食」「温泉」「体験」、さらには癒しや健康など「ニューツーリズム」と組み合わせた観光地づくりを北海道全体の「連携」により進めていくことにしている。

例えば、①花の観光地同士や、体験観光など他のメニューと組み合わせたモデルルートの開発②花観光スポットでの花の販売や、花摘み体験などを花卉生産者と共に行う「産業間の連携」③沿道への花の植栽といった「花のまちづくり」の取り組みなど「行政と住民の連携」や「地域内・地域間での連携」などだ。

これらを促進することにより、「花を楽しむ北海道」と誰にも思ってもらえるような「花大陸 Hokkaido」の実現に向けて取り組んでいく。

来年七月には「北海道洞爺湖サミット」が開催される。これを契機として、花観光も北海道の魅力として発信していくことが観光振興の上で大切だ。道民、花の関係者などが一丸となり、全道各地を会場とした花のイベント「ガーデンアイランド北海道二〇〇八」の開催や沿道への花の植栽などをさらに充実し、北海道にきた人々に感動を味わってもらいたいと思う。



篤農家の「家族で独占しては勿体ない」心意気

時事通信社福島支局記者 ● 菊地由美子

事情を知らない人が、ここを訪れたなら「福島市が管理している丘陵公園」と思うだろう。「入場料もないのに、なんと美しいのか」とも。しかし、そこは一個人の花木・花卉園なのだ。オープンガーデンというよりも、オープンヒルだ。桜のシーズンだけで二十万人をゆうに超える来訪者がある。

「秋山庄太郎「福島に桃源郷あり」

春になると、福島市の花見山一面を色とりどりの花が覆いつくす。桜、桃、梅、レンギョウ、ボケ、モクレンなど、その種類も様々だ。

「福島に桃源郷あり」——写真家の故・秋山庄太郎氏は生前、花見山をそう賞賛して愛でたという。秋山氏は二〇〇三年に亡くなるまでの三十年近く、毎年のように福島に通ってきては、花見山を被写体にして多くの作品を残した。

花見山はJR福島駅から南東に四、五キロの渡利地区にある。一九五九年に「花見山公園」として一般開放されて以来、訪れる観光客は右肩上がりが増え、昨年の花見シーズンには約二十五万人まで膨らんだ。今年は開花が早まるなどしたため若干減少したが、それでも県内をはじめ関東圏などから約二十三万人が足を運んだ。

あまり知られていないことだが、花見山は花木生産農家の阿部一郎さん（87）が所有する個人の

庭園で、今でも出荷用の生花を育てる畑という役割を担っている。そして、戦前から戦後にかけての阿部家の経済的危機を救った山でもある。

「自生の花を取って売っていた昔

話は八十年近く前に遡る。

福島県内では当時、養蚕業が盛んで、伊達郡梁川（現在の伊達市梁川町）などは「蚕都」として知られた。しかし一九三〇年、米国で始まった恐慌の影響が日本にも襲い掛かってきた。生糸輸出が激減すると、蚕の繭や生糸の値段が下落し、繭を生産していた多くの農家が痛手を被った。

山で伐採した木を売る傍ら、養蚕業を営んでいた阿部家もその例外ではなかった。さらに祖父が手を出していた事業に失敗し、阿部家は山のみならず、家まで手放さざるを得なかった。

阿部さんの祖父や父は少しずつ山を買い戻しながら、その日の暮らしを守るために山に自生していた花を取って売る生活を始めた。

そして、生け花用の切り花の売れ行きが好調になってくると、簡単な花を栽培するようにもなった。これが、花見山の始まりだ。

「花見山と共に歩んだ日々を思い返しても、あの頃が一番辛かった。花で一家が食べていけるのだろうか」と、お先真つ暗という気分だった——阿部さんは当時をこう振り返る。

このとき、花見山はまだ雑木の山だった。

「夢を見ながら鋤一本で開墾

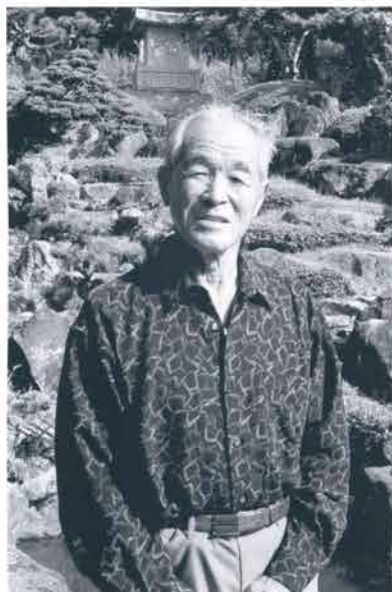
一九三五年、阿部さんは信夫農学校（後の福島養蚕高、現・福島明成高）を卒業し、家業となった花の栽培を本格的に手伝うようになった。とはいっても、山の大部分はまだ荒れ放題。若い阿部さんの仕事は専ら山を開墾することだった。

道具は鋤一本だ。掘り起こせる面積はよくでき一日三坪。それでも阿部さんは雨の日も雪の日も山に向かった。山を切り開けば、それだけ畑が増える。阿部さんには山全体を花で埋め尽くしたいという夢があった。

「やがては奇麗になるだろう。花を植えて大きな夢を咲かせよう」——こうして脳裏に色とりどりの花が咲き乱れる様子を思い描きながら、阿部さんは来る日も来る日も畑仕事に明け暮れた。

土を耕しては花を植える。山を眺めては新しい花を足す。キャンパスに油絵の具を乗せるように、雑木山に少しずつ色がついていった。

五〇年代後半に入ると、花見山の評判はジワジワと浸透し、花見シーズンに入ると、花を見せて欲しいと訪れる人が多くなった。



(上) 花見山公園の入り口
(下) 「花」を語る阿部一郎さん (87)

「そうすると、いちいち『見せてください』『いいですよ』と答えるのも煩わしいので、みなさんの花園として自由に散策してくだされば、ということで開催したのです」

五九年四月、阿部家は山を公園として開放することに決めた。花を見る山ということで、名前は「花見山」とした。

「生活のため、農業者としての自分の夢のために植えた花でしたが、花の素晴らしさを見るにつけ、この景色を家族だけで独占しては勿体ないと、誰もが心易く見ていただければと思うようになりました」

それでも、その頃はまだ近所の人が花見をしたり、地元の幼稚園や小学校の遠足などに利用される程度だった。

花見山の名を一躍全国区にまで引き上げたの

は、阿部さんが最も印象に残っている客の一人だという写真家の故・秋山氏だ。

秋山氏は、自身が審査員を務めた写真賞の出品作品で花見山を知り、七五年頃に初めて訪れたと言われている。山形県米沢市に別荘を持っていたこともあり、たびたび途中下車して花見山に立ち寄るようになったらしい。

秋山氏に花見山を紹介した写真店経営者は、秋山氏の花見山への熱の上げようは並大抵ではなかったと話す。

「晩年は年に四、五回も訪れていたのではないでしょう。か。暇さえできればという感じで、ある日突然、『今、福島駅の降りちゃったんだけど』なんて電話が掛かってきたこともありました。惚れ込んでいるなんてものではなかったですね」

秋山氏が展覧会や講演会などで花見山を紹介するようになると、その名前は全国に広がった。

（客20万、ついに市が乗り出した

二〇〇四年には、花見山への観光客は二十万人に達した。これを機に、市はそれまで地区の住民

らで構成される周辺維持管理委員会が行ってきた渋滞対策や案内業務などに乗り出した。

同年、同委員会、福島市観光協会、福島市物産振興協会による「花見山環境整備協議会」が設立され、現在に至るまで表向きは同協議会が周辺環境の維持に当たっている。

花見山公園は個人の庭園でありながら、入場料を取っていない。このため、誘導看板の設置やシャトルバスの運行といった環境整備は、市が設けた駐車場での協力金と市の補助で賄われている。

「花の舞台は私が整えるので見に来た人のことは市の方でお願いします」というのが阿部さんの立場のようだ。しかし、それでは私財を投じた山に、どれだけ観光客が来ても、阿部さんの懐には一銭も入らない。なぜ入場料を取らないのか。

「個人の庭園で入場料を取ると市が管理できなくなる」「入場料を取ると客に権利意識が生まれるので、うまくいなくなるからでは」と、周囲はいろいろ想像する。

しかし、阿部さんの考えはもっとシンプルだ。

「そもそも観光のために開放したのではなく、花の美しさを分かち合っただけだと思っただけです。お金は生活で使えるだけあればいい。お金を貯めるために生きているのではなく、花に託した夢で人生を生きていきたい」

阿部さんは今年七月、花見山を育てた功績を讃えられ、福島市から「ふるさと栄誉賞」を受賞した。家業の花木生産は長男が後を継いでいる。花見山は今も阿部家の花木・花卉生産の場でもあるのだ。



花博跡地は、かく輝き続ける



浜名湖ガーデンパーク
管理センター 所長

● 倉島克美

空前の規模で開催され、「花も実もあった」と評された二〇〇四年の「浜名湖花博」。その跡地が、花を中心に据えた県営都市公園「浜名湖ガーデンパーク」として再スタートを切ってから二年余。公園管理者に、こうした公園の運営管理の難しさ、喜びと抱負を語ってもらった。

この公園の総面積は、五十六ヘクタール。東京ドームの十三個分に相当する。浜名湖畔の恵まれた水辺環境や景観を活かした散策・スポーツ・イベントなどを楽しめる多機能型の公園だ。

園内はハ西側エリア／ハ街のエリア／ハ里のエリアの三つのゾーンからなり、遠く太平洋を一望できる高さ五十メートルの展望塔、フランスの印象派を代表するモネがジベルニーに造った庭と家を再現した「花の美術館モネの庭」、一億五千万年前の世界最古の種子植物のジュラシックスツリーなどがある植物コレクションの「百華園」、さらに異国情緒たっぷりの「国際庭園」など、魅力あふれる施設がある。

ここの花や植物には、見る者を圧倒するようなポリウム感はないが、少量多品種で自然に配置されており、料理に例えるならば、バランスのとれた日本料理のようなさっぱり感がある。

また、果実や緑量の多い植物も多いため、パン、

ウグイスなどの鳥類、野ウサギ、タヌキなどの小動物に遭遇することもある。

（協働で）「成長する公園」

ここの管理運営は十三人の県職員が担当しているが、強力な助っ人がいる。ボランティアの皆さんだ。

車椅子の貸し出し、案内、巡回業務、植物の手入れ、体験教室の実施などに千二百人（登録数）ものボランティアが活躍している。

その中には、来園者から「竹とんぼのおじいさん」と呼ばれる八十一歳の名物ボランティアさんがいる。竹を使った昔の遊びを無料で体験させてくれる、ガーデンパーク一番の人気者だ。

公園管理者である県と、ボランティアなど地域の人々との協働でより良い公園を育てていく新しいスタイル「成長する公園」が、ここの特色だ。

今後の公園管理は、官民協働で運営し、主役で

ある県民に「自分たちの公園は、自分たちで育てる」という意識を持ってもらうことが肝要だ。

開園から二年三カ月の来園者数は二百四十万。当初見込みは、年間二十二万人だったから嬉しい誤算だ。

オープン当初は、「浜名湖花博」のインパクトが強くて「花が少ない、華やかさが少ない、売店がない」など数多くの苦情や要望が寄せられたが、二年経過してようやく、ここの良さが来園者に認知された感じがする。

当公園の良さは何と言っても、この公園ならではの独特の雰囲気——「ゆったり感」「のんびり感」「開放感」だ。

公園の特徴である四季折々の花や植物、歩きやすい勾配四％以下の園路と幅員八メートルの主園路、広々とした芝生スペースなどが心身をリフレッシュさせる。

私は「浜名湖畔にある心のオアシス・ガーデンパーク」というコピーを使っている。

三十歳代～六十歳代の女性が来園客のほぼ六割を占める。大半が花や植物の観賞が目的だ。

四～六月は「花の美術館モネの庭」のバラ、クレマチスなど園内至る所が百花繚乱状態で、天候のよい日曜日は来園客が一人を超えてくる。最近では、名古屋、岐阜、三重など県外からの観光客も少なくない。

公園から車で十分程度の所に地元銘菓「うなぎパイ」の製造工程を体験できる「うなぎパイファクトリー」があり、当公園と組み合わせた旅行商品が浜名湖周辺の観光コースとして定着化しつつ



ある。来園客の主力である中年女性には、「花より団子」ではなく「花とうなぎパイ」が大いに受けている。

来園客で次いで多いのはファミリーだ。子供広場や芝生広場でキャッチボール、サッカー、ネット遊具などを、親子で楽しんでいる。

見ているこちらの心も温まる。親子の絆を深めるには、もってこいだ。

（雑草には時機、不道德には粘り）

最も苦勞しているのは、「公園管理は、雑草との闘い」と言われるように、雑草対策だ。雑草とは抜いても抜いても、すぐ生えてくる元氣者で、いかにタイミングよく抜くかがポイントだ。

次いで大変なのが、来園者のモラルの問題だ。

公園内には、来園者に安全で快適に楽しんでもらうために一定のルールが設けられている。例えば「ごみは必ず持ち帰る」「ペットの糞は始末しリードは離さない」などだ。

ごく一部の人が守らない。

注意すると「なぜ私だけに注意をするの」「どこに表示がある」「法的根拠はあるのか」「自身の非を認めない」。



(上)「花の美術館モネの庭」(バラの5月) (下)子どもが水遊びする場もある

誠に困ったものだ。家庭でのしつけが悪いからなど、いろいろ言われているが、公園を管理する立場としては粘り強く対応するしかない。

（真に豊かな暮らしには花がある）

この公園の役割・目的の一つは地域活性化だ。

この地域は、農・工・商業とも活発だが、産業間に格差がある。苦戦している部門の一つが観光産業だ。

近くに、館山寺温泉などの温泉地があるが、団体宴会客対応のホテル・旅館が多い。十年前の間宿泊客数は七十万だったが、旅行ニーズが「個人・小グループ型」に大きく変化する中で、宿泊客数六十万、五十万と年々減少している。

当公園の「花の美術館モネの庭」「展望塔」「国

際庭園」は、観光動機の原点である非日常性を十分に体感できる素材だ。共に風光明媚な浜名湖畔にあるのだから、何とか点から面の魅力となるよう既存の観光施設と連携を深めたい。

ホテル・旅館などの観光事業者だけでなく地域に大いに喜ばれたのは大型音楽コンサート開催だった。

昨年八月の二日間、サザンオールスターズの桑田佳祐、福山雅治など人気アーティストが集まった野外ライブイベント「夢人島 Fes 2006」を開催し、十二万人が楽しんだ。

市内のホテル旅館はすべて満室で、観光、飲食・物販業者への波及効果も四十億円程度あった。

公園としても、その名を全国に発信できたこと、地域住民も音楽の素晴らしさを体験できたことなどイベントの効果は、絶大だった。

これほど地域全体の人々に喜ばれ、元氣の出るようなイベントなら、これからも年一回はぜひ開催したい。

「浜名湖ガーデンパーク」は、新たな暮らしの提案の場でもある。新たな暮らしとは、多くの花や植物にあふれ、人々のふれあいのある「真に心豊かな社会づくり」だ。

花や植物には「潤い」「安らぎ」「活力」を与えてくれる不思議な力があり、人々の心を浄化し、コミュニケーションをスムーズにさせる働きがある。

「浜名湖ガーデンパーク」を通して、人々の暮らしの中に花や植物を取り入れる花文化が展開され「真に心豊かな暮らしづくり」が実現するよう期待している。



市民と交わり総合的な学習効果が



千葉県立上総高等学校教諭

● 風間龍夫

園芸科で学んでいることを地域で活かそう。しかし、自分たちだけの活動では限界がある。では地域と共に取り組もう。さらに地域全体に広げよう——と発展してきたのが、千葉県立上総高校園芸科の「地域に出たの花いっぱい運動」だ。

本校は内房の中ほどに位置する千葉県君津市にあり、一九一〇年（明治四十三年）に農学校として創立された。現在は園芸科一クラスに普通科三クラスの併置校になっている。園芸科は農業高校としての伝統と特性を活かし、地域に根差した学校づくり、地域との交流活動に努め、幼稚園児・小学生の農業体験学習、社会人対象の園芸講座、老人クラブとの交流会、花いっぱい運動など様々な活動をしている。

（全国的な賞を総なめ

このうち、花いっぱい運動は園芸科生徒による農業クラブの自主的な活動として展開され、数々の全国的な賞をもらっている。

日本花いっぱい協会など主催の「全国花いっぱいコンクール」（学校の部）では、〇三年度は文部科学大臣奨励賞、〇四年度は内閣総理大臣賞を受賞した。

〇五年度は農林水産省、国土交通省が提唱し、日本花の会などが主催する「全国花のまちづくりコンクール」で最高位の花のまちづくり大賞、農林水産大臣賞を受賞した。

高校生が自主的な活動として市民と協力し花のまちづくりに取り組み、地域のセンター的な役割を果たし、活動を通じて社会性や問題解決能力を養い人間的に成長した点が高く評価された。全国規模の花コンクールでは二年連続の日本一だ。

〇六年度は「緑の都市賞」で都市緑化基金会長賞を受賞した。花と緑あふれる街づくりを通して地域との連携を図った活動は、地域のコミュニケーションの醸成にも寄与した取り組みであり、全国モデルとなると評価された。地域では「花の上総高校」としてすっかり定着している。

（海ほたるを春まっさかりにした

農業高校生ならではの学習の成果を地域で活か

そうと、九六年に君津市役所に鉢花を飾ったことが始まりだった。その活動は、後輩へと代々引き継がれ発展してきた。

九八年二月には、開通直後の東京湾アクアライン「海ほたる」を菜の花で飾った。それは新聞各紙に「海ほたるは春まっさかり！」などと紹介された大きな反響を呼んだ。

全国植樹祭が千葉県で開催〇三年。上総高校は草花装飾で大活躍し、植樹祭に出席された天皇、皇后両陛下がその帰路、「海ほたる」の花壇をご覧になれるという榮譽にもあずかった。

活動の基本は、自分たちで育てた花をプランターに植え、季節を通して、地元の市役所、駅、病院、老人ホームなどの公共施設や、地元商店街などを飾ることだ。

「海ほたる」を例に取れば、春はキンセンカ、パンジー、夏はニチニチソウ、秋はサルビアなどと季節の花を届けている。

鉢植えのマスクメロンやアサガオの行灯仕立てを作ったり、十二月はリースを飾り付けたクリスマス風の装い、正月は門松で迎えるなど工夫をこらしている。

また、「海ほたる」など多くの場所に、季節の花壇を作っている。最近では木更津市内の国道脇や木更津駅などで、市民団体と協力した花壇作りに力を入れている。現在、地域には常時約五百個のプランターを飾り、花壇は九カ所。年間プランター約二千個を飾り、花壇苗約二万本を植え付けている。君津市役所、「海ほたる」には年間二十数回、花を届けている。



（研究課題も設定している）

本校の花いっぱい運動の特徴は、①学習として取り組んでいる②地域と連携して活動している——ことで、当初の「地域を花で飾ろう」から、自分たちだけの活動では限界があることを知り、「地域と共に取り組もう」、さらには「地域全体に広げよう」と発展してきた。

活動は学習したことを基に地域に働き掛け、地域と交流し、そのことによって地域から学ぶという循環の中で行われ、かつ幾つかの課題を設定して取り組んでいる。例えば、「プランターに適した草花の選定」という課題では、今まで四十種類以上の草花について花のきれいさだけでなく、水やりや花がら（咲き終わった花）取りの難易度、開花期間など、利用し楽しむ人の立場を考え評価しデータを蓄積している。

「商店街の花いっぱい運動活発化」では、街の人たちから花の管理方法がよく分からないという声があった。実際に花が日中にしおれるなど問題があり、花の管理方法を説



小学生と花を植えつける園芸科の生徒

明した「花いっぱい通信」を発行してアドバイスしたり、生徒の審査で花コンテストを行ったりして改善した。

今では日中に花がしおれることはほとんどなく、花の手入れは見違えるようになった。

「花壇のデザイン研究」では、病院には患者さんが心穏やかにと虹をイメージした花壇、市役所の花壇は毎年一月、干支の花壇、アクアライン「海ほたる」の二月はハートマークでバレンタイン花壇などアイデアを出し合い工夫している。学校近くの公民館前の花壇では今年の春、各団体がクジラ、アヒル、カエルなどキャラクター花壇に取り組んだ。

六月、木更津駅前の花壇では、木更津名物「證誠寺の狸ばやし」にちなんで、月夜に踊り出す数メートルの巨大タヌキの絵柄に取り組んだ。

（花づくりは人・街・地域をつくる）

活動を広げる中で、多くの市民団体と連携を深め、上総高校が花のまちづくりのセンター的役割を担うことができればと考えている。木更津駅前の花壇作りでは、高校生が街の活性化に貢献したとの評価を受けた。本校が地域づくりに果たす評価は高く、地域からの要請は増している。

○五年には学校近くの公民館前並木道に長さ八十メートルにわたる花壇作りを、本校が中心となり、小中学校や商店街、老人クラブ、行政機関など関係八団体と始めた。各団体が十メートルの区画を担当し、花壇のデザインだけでなく、花の手入れ状況も審査対象に地域住民によるコンテスト

を実施している。

市民団体との連携は花壇苗を提供するだけから、一緒に植え付け、その後の管理も指導するなど程度の差はあるが、市民団体には植えて終わりでなく継続的な管理をするようお願いしている。

草取りや花がら取り、水やりなどの手入れをしてこそ、育てる楽しみを仲間と共有し、地域住民が主体的に活動する本当の花のまちづくりに発展できると考える。

本校の花いっぱい運動は、学習したことが人のためになるということで、体験的学習の新しい取り組みであり、地域に貢献する学習活動でもある。地域に認められ、評価されることは、生徒の学習意欲の向上に大変に効果的だ。人との触れ合いを通して共に生きることが学び、社会性・人間性の向上を目指す幅広い総合的な学習として進めることができる。

○五年度の「全国花のまちづくりコンクール」での授賞式で、審査委員長の琉球大学比嘉照夫教授から「上総高校の活動は社会的な財産である」との講評を受けたり、農文協発行の『農業教育』で「上総高校の花いっぱい運動を中心とした一連の活動は、地域の園芸コーディネーターとして、地域の人びとのなかに園芸を楽しむライフスタイルの裾野を広げ、園芸文化の力を高める活動でもある」と評された。

こうした評価には、生徒ともども励まされる。「花づくりは 人づくり 街づくり 地域づくり」を合言葉に、継続は力なりと、今後も息の長い地道な活動を続けていきたい。



東京下町の「緑の拠点」が目指すもの



向島百花園サービスセンター所長

● 椎名和美

二〇〇四年に創設二百周年を迎えた百花園は、江戸の風流を伝える多くの行事を有する都立庭園だ。面積は一万一千平方メートル弱で、九つある都営庭園の中では最も小さい。

ここは、いわゆる大名庭園とは違う。一八〇四年（江戸・文化元年）に商人だった佐原鞠場と、江戸の文人達により作られたさつくばらんな庭だ。まさに今日的な「協働」による庭づくりで、このことから「庶民、文人の庭」とも呼ばれている。

創設当時は、亀戸の梅屋敷をモデルとした「新梅屋敷」が一通り成功し、佐原鞠場は次に四季の客寄せのために、四季の植物目録・花暦『群芳暦』や『春、秋の七草考』をまとめ、園の名称も四季の草花を中心とした「花屋敷」、そして「百花園」へと変わる。百花園の名前は「四季百花の乱れ咲く園」という意味で付けられたとされる。いずれにしても創設から十年ほどで、四季折々の草花が咲き乱れる花園が創出されたのだ。

（明治の大洪水に、昭和の大空襲

順風満帆だった百花園も、時代の潮流に押し流され、一九一〇年代（明治末）には衰退する。一

つは交通機関の発達に伴い、箱根などの観光地が開発され来園者が減少する。一九一〇年（明治四十三年）には隅田川の大洪水。水は一カ月も引かず百花園は経営苦難の時代を迎えた。

ところが、救世主が現れる。向島に住む石油商、小倉常吉だ。彼は百花園を佐原家から買い取り、庭園の維持管理は従来のまま佐原家に任せ、百花園は生き伸びた。しかし常吉亡き後の三八年（昭和十三年）、夫人は東京市へ寄付。東京市は整備して翌年開園する。

しかし、四五年には東京大空襲。二十九の石碑、数本の樹木を残し、すべて灰と化した。地域の人々に支えられ四九年に再整備、開園して今日に至る。この間の荒廃で百花園は文化財としての価値を失い、「名勝」の称号が解除され、その復活は七八年の国による文化財再指定「史跡、名勝」まで待たねばならなかった。

（四季うつろいの花景色

『東都歳時記』（天保九年）では百花園の草木は、おおよそ七百余種と紹介している。

明治大洪水、東京大空襲後の再生復興の際、注

目されたのが、佐原鞠場が書き記した百花園の植栽のバイブルといわれる四季の花暦『群芳暦』だ。『群芳暦』には、草本類三百三十六種、木本類百七十三種類、合計五百九種類が記載されている。これに基づき、どのような植物が植栽されていたのか推測し、植物導入計画が立てられ再整備がなされている。

現在、百花園の樹木は二百二十五種、約千四百四十本株、草本類二百二十二種が記録されている。百花園の春は、梅とカタクリから始まる。各種の桜が開花、初夏までの三カ月間は百花繚乱。週ごとに新たな草花が咲き乱れる。

夏はユリ、ノカンゾウ、キキョウなどが、秋はハギ、オミナエシ、フジバカマ、クズ、ススキなど秋の七草、ハゼなどの紅葉。

冬から春に向けては、サザンカ、セツブンソウなどが来園者に「春近し」を告げる。

百花園の四季は、日本の四季を詠んだ「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて、冷しかりけり」（道元禅師）の歌を体感できる。



向島百花園の庭門



また「虫ききの会」「月見の会」など江戸情緒豊かな伝統行事が継承されている。

このような伝統行事を継承している庭園は都立九庭園の中では百花園のみだろう。

（ボランティア）「庭園ガイド」に人気

百花園の魅力を知るためには、「ただの雑草の茂る草庭ではないか」と思い込む前に、できれば創設からの歴史、庭園の創設の意図など予備知識を頭に入れてから散策することが必要条件といえようか。このため、二年前から百花園の歴史を簡単に説明した展示を始めた。

また、多くの来園者に百花園の魅力を知ってほしいとの思いから「庭園ボランティアガイド」が昨年スタートした。

毎週土、日曜の午前と午後の二回案内している。来園者からは大好評。来園予定のグループ、団体からはガイドの依頼、問い合わせが続いている。



（上）「変化朝顔展」に訪れた人々

（下）路地園芸の講習会

来園者の九八％は「花」を求めてくる。歴史、文化は二％ほどか。他の庭園と同様、来園者の多くは五十、六十歳代。中でも女性の割合が高い。

○五年度から始めた「年間パスポート」の購入者の大半は地元墨田区と、その周辺区の人たち。

○五年度の総入場者は約十万人。○六年度は十三万人が訪れた。

百花園は他の庭園に見られない①正月の七福神めぐり②伝統行事の夏（大輪朝顔展、虫ききの会）③秋（萩のトンネル、月見の会）などの人気が高い。来園者のピークは九月、萩のトンネルだ。次が一月、七福神めぐりの効用だ。三位が十月だ。

百花園の植物は「伝統行事」と結び付いている。明治時代から続くのが、宮中への献上「春の七草籠」。七草の中の二草（ダイコン、カブ）の栽培のため種の入手と特別な管理、籠への植え込みと、その後の養生が年末の重要な行事となっている。

百花園を特色付ける展示用の草花である「夏の

七草」「秋の七草」の種子、特に山上憶良と佐原鞠塙に由来する秋の七草苗の入手には苦労している。これらの植物は栽培にも慎重な管理を要する。

二年前から、百花園が創設された江戸期に流行した各種園芸を栽培し展示している。春先にはアジサイ展（ヤマアジサイ）、夏には変化朝顔展、秋には千輪菊の展示がある。

（開かれ、街と連携する拠点として

百花園は、これまで地域に助けられて生き続けてきた。現在も地域と強く結び付いた庭園だ。

百花園がある東京墨田区の緑の量は二十三区の下の方に位置する。墨田区の「緑の基本計画」では、百花園を緑の街づくりのモデルと位置付けている。小さな百花園でも、鳥、昆虫、水生生物など生物も多様だ。

百花園は「緑の拠点」には間違いないが、ただの拠点ではなく、地域に開かれた、街と連携して花緑の支援を進める拠点でありたい。

「路地園芸」——聞きなれない用語かもしれない。向島地区は路地が迷路のように行きかう。生活のにおい溢れる向こう三軒両隣。その路地に各家の個性が溢れる鉢植えが立体的に重なり合う——そんな風景を「路地園芸」と呼ぶ。

二年前から、墨田区と連携した行事として、地域特有の「路地園芸」の推進、普及啓発の講演、野草市の開催などを始めた。堆肥の配布、草花の交換市を春と秋の年二回行ってきた。今後とも地域に開かれた支援活動と地元区との連携をさらに広げていきたい。

芝居小屋復元から環境保全まで

数々の歴史的財産を残し、伝統的町並みの見られる出石町（合併により現在は豊岡市）。古くは天日槍の伝説が記紀にあり、江戸時代は五万八千石の城下町だった。町のあちこちには、かつてのたたずまいが残っている。昔ながらの町割りや碁盤の目のように整然と並んだ町並み、町屋の外観を飾る虫籠窓や格子窓などに往時の面影が色濃い。

この出石町に、一九〇一年（明治三十四年）に建てられた芝居小屋「永楽館」がある。映画館としても使われ、一九五〇年代の中頃まで、但馬の大衆文化の拠点として、多くの人たちに親しまれ、愛されてきた。全国に残る数少ない芝居小屋の中



湊崎康雄事務局長（左）と吉岡敏行会長

でも、場所を移転せず現存する劇場建築では最古のものという。回り舞台、花道、せり上がり、スッポンといった舞台装置や、芸人さんの落書きが残る楽屋など、ほぼ原型をとどめている。

しかし五〇年代後半には、テレビの普及や娯楽の多様化により、芝居小屋としても映画館としても機能を停止した。その直後には館内の一部がパチンコ店になったが、それも間もなく閉店し、以来、休館のまま放置されていた。

町並み活性化のための資源

八八年に出石町で開催された「第一回兵庫・町並みゼミ」で、永楽館が取り上げられ、「わたしたちは、この回り舞台を持つ劇場を拠点として、新しい舞台芸術を創り出し、新しい出石の文化の拠点としていく」との宣言が確認された。

それを受けて、同年十月二十六日、「出石城下町を活かす会」が設立さ

れ、まちづくりの会としてスタートした。

活かす会はたちまち、多方面に交流の輪を広げた。活動も活発で、全国から文化財行政、まちづくり、建築などの専門家を迎えて講演会を開いた。

永楽館を取り壊して駐車場にする動きが出ると、活かす会は「永楽館は出石の町並み活性化のため、貴重な資源である」として、その復元保存に活動の力点を置いた。

20年以上かかったが…

「永楽館」は現在、復元工事中だ。「やっとここまでできた。念願の復

元という夢が叶いつつある。この復元工事が始まるまでに二十年以上かかった」と、活かす会の吉岡敏幸会長は振り返った。

永楽館は個人所有の物件のため、放置されたままでも、第三者が手を付けることはできなかった。

そのため、活かす会は所有者と町役場に話を持っていき、永楽館を復元することの重要性を粘り強く説き続けた。そして、ようやく九八年、永楽館の所有者に建物を町に寄付してもらった。

老朽化のため傷んだ壁や床の修繕が必要だったため、活かす会は会員総出で大掃除と修繕を行った。

また、永楽館が出石町にとって貴重な地域資源であることを住民に認識してもらうため、啓発目的の講演会や芝居、コンサートなどを毎年開催し、永楽館の活用方法を提案してきた。

こうした活動に呼応するように市は二〇〇五年、復元工事に取り掛かった。

建設から百年以上経過した永楽館が平成の人々の手による復元工事で見届けようと、活かす会は頻繁に工事見学会を開催している。また、か

★ 団体プロフィール ★

設立年＝1988年
設立・運営主体＝自主的組織
代表者＝吉岡敏幸
事務局長＝湊崎康雄
会員数＝140人
＜事務局連絡先＞
〒668-0221
兵庫県豊岡市出石町町分232-3
（電話）0796-52-2793



復元工事前の永楽館



「楽々鶴」の酒蔵

つて「永楽館」で上映されていた懐かしい映画ポスターを、近隣の会館に展示するなど、永楽館をPRする活動を行っている。

活かす会は、行政と緊密に連携を取りながら専門家を交え、三位一体で永楽館の保存・活用方法の検討を進めている。

町屋景観のマニュアル作成

活かす会は永楽館の復元運動のほか、やはり出石町の観光シンボルとなっている酒蔵を守る運動も続けている。江戸時代から綿々と続いた出石町の地酒「楽々鶴」の経営が苦しくなり、酒蔵が閉鎖に追い込まれよ

うとしている。そこで一人でも多くの人に、酒蔵を知り、親しんでもらうため「酒蔵コンサート」を行っている。同時に地酒を愛飲する運動にも取り組んでいる。

また、町屋を守るための方策を研究会や交流会の開催を通じて模索している。

その成果の一つとして、「町屋デザインマニュアル」の作成がある。

出石城下町は八七年に兵庫県の都市景観形成地区の指定を受けた。活かす会は、都市景観形成基準に適合するように住民と建築業者に働きかけ、その際に「この基準だけでは、張りぼて式の映画セットのような町になってしまふ」「もつと歴史を探り、出石らしい町屋を目指す指導書が必要ではないか」などの検討を重ね、「町屋デザインマニュアル」を

作り上げた。作成されたマニュアルは建築関係者と住民に渡され、新築や改築に活かされている。また、マニュアルにより町並みの景観意識の高まりに繋がっている。

しかし現在では、出石城下町にある町屋も空き家が目立つようになっていく。放っておくと、町のたたずまいが損なわれてしまふ。そこで今後も町屋を守るための方策を検討し続け、市に提言していく活動を続けていく考えだ。

さらに、機関紙「連格子」を発行して、まちづくりの課題などを住民と共有することに努めたり、ゴミ減量化などの環境保全にも取り組んでいる。

活用してこそ価値あり

豊岡市は、出石城下町などの歴史的な町並みを保存するため「豊岡市伝統的建造物群保存地区保存条例」を〇六年十二月に制定した。活かす会の町並み保存活動の成果とも言える。

豊岡市は今年度中に「重要伝統的建造物群保存地区」の指定を文化庁に申請する運びで、活かす会は指定されれば酒蔵の修理に取り組むよう、豊岡市へ提言する方針だ。

活かす会の活動は順調とも見えるが、課題も出てきている。

公の施設の運営管理は、指定管理者に委ねられる方向にある。豊岡市も「復元永楽館」の運営は指定管理者に委ねる意向だ。

そうなった場合、NPO法人でもない自主団体である活かす会では財政的な問題を含め受け皿になり難い。永楽館の文化財としての価値を守ることが運動の中心課題だっただけに、メンバーの心中は穏やかではないだろう。

「しかし、永楽館は活用してこそ価値がある。活かすために必要なものは永楽を愛する人であり、また企画である」と、事務局長の湊崎康雄氏は語る。

永楽館と共に歩み続けた経験・人脈を活かし、受け皿となった団体へ活用ノウハウを提言するなど、バックアップする考えだ。

永楽館の復元工事は〇八年六月末には完了して、同年秋のオープンが予定されている。

かつての満場の拍手や歓声が永楽館によみがえる日を目指し、活かす会の活動はますます広がっていくだろう。

秋田県 鹿角市

うまカレーってどんな味？

～男女で料理するコンテスト～

鹿角市は人口三万七千、秋田県の最北東部に位置する。十和田八幡平の山々と溪流が美しい。秋田県の郷土食として有名なきりたんぼ発祥の地ともいわれ、清涼な気候と肥沃な土壌は米「あきたこまち」をはじめ様々な特産品を産み出している。

また、日本三大囃子として有名な花輪ばやしや花輪ねぶたに象徴される伝統的な祭りが多い。

そうした鹿角市で、二〇〇五年から行われているイベントが「男女でつくるうまカレーコンテスト」だ。

市の男女共同参画推進標語「男だけの色なしカレー 女だけの味なしカレー 男女でつくるうまカレー」に沿い、男女ペアがつくるカレーの味、さらに調理の際のパートナーシップを審査し、表彰するというユニークな内容だ。

何気ない一言から

このイベントが実施されることになったのは、鹿角市が男女共同参画

社会の形成を進める際、そのイメージを地域へわかりやすく発信するために標語を広く募集したことによる。

延べ八百八十五の応募作品から、選定委員会による一次審査、住民投票による最終審査を経て選ばれた最優秀作品が、高校生が考えた「男だけの色なしカレー 女だけの味なしカレー 男女でつくるうまカレー」だった。カレーが世代を越えて親しまれる料理だからだろう。幅広い世代から圧倒的な得票を集めた。

選定委員では「この標語を今後の啓蒙活動の中で具体的に活かすことはできないか」という声が上がった。そして、「男女でつくるうまカレーって、どんなカレーなんだろう」という選定委員の一言から、実際に男女で一緒につくってもらい、男女共同参画について考えるきっかけになるイベントを開催しようというアイデアが出た——経緯を語ってくれたのは、鹿角市共働推進課の佐藤大

介さん。

しかし開幕に当たり、男女共同参画への意識を向上させるイベントを市が主体となつて実施しては「行政側の押し付け」にならないだろうかという懸念があった。

そこで市は〇五年、広報誌に「男女でつくるうまカレーコンテストを開催しませんか」という記事を掲載し、イベントを開催するため実行委員を市民から募集した。

この呼び掛けで集まった地域住民十人により実行委員会が結成され、そして同年九月に、第一回男女でつくるうまカレーコンテストが開催された。

地域おこしにも貢献

実行委員の阿部正幸さんは「実行委員会結成からコンテスト本番までたった三カ月だった。時間がない中で準備を進めた割には、大きな反響



カレーづくりに取り組む男女

があった」と当時を振り返った。

実行委員会を結成した際には、男女が手を携えてカレーをつくるということ以外、全く決まっておらず、また、運営予算も僅かなものだった。この難題に対し、実行委メンバーは、負担をあまり伴わずに実現できそうなアイデアを出し、実行力で乗り越えていった。

例えば食材は、地元産にこだわることにした。地元には、特産品の比内地鶏、かづの牛、八幡平ポーク、トマトなどカレー用の食材がそろっている。

地域イベント助成事業とは

【助成概要】コミュニティが主体となって実施する、創意と工夫に富み地域の活性化に貢献する地域イベントに対して助成する。

【助成額】1団体につき100万円を限度とし、助成率は対象事業経費の100%を上限とする。

【交付団体数】2006年度 78団体
2007年度 57団体（内示）

【問い合わせ先】業務課
TEL 03-5202-6137



第2回コンテストの参加者たち

これらの食材を、委員らが生産者を一軒ずつ説明して回り、提供してもらった。イベント参加者や来場者に地場産品の見直し・消費拡大を促す「地域おこし機運」にも繋がった。

事業PRのため「男女でつくるうまカレー」ってどんなカレーなのでしょうか」をテーマとして、男女共同参画に関するエッセイを募集した。予想以上の応募があり、コンテストのプレイベントとして実施するまでの規模になった。

そして本番コンテスト。来場者は約三百人くらいだったが、秋田市などからの参加者もいた。「継続開催

を希望する声が多く寄せられた」（阿部さん）そうで、実行委のメンバーたちは終了後、大きな達成感を得たようだ。

助成を受け軌道に乗った

この予想を上回る反響を受け、実行委員会は第一回終了後、間髪入れずに次回実施に向けて、本格的な検討に入った。その際、最大の課題は「予算をどう確保するか」だった。

実行委員会と市は協議の末、市として、このイベントを地域活性化センターの地域イベント助成事業に申請することにした。その採択を経て、

〇六年に第二回を開催できた。

阿部さんは当時を振り返ってこう語った。

「助成事業に採択され、非常に助かった。また、全国から申請された多数のイベントの中から採択されたことが、実行委員には良い意味でのプレッシャーとなり、自信に繋がった」

「初回は走りながら企画を考えたので、準備不足は否めなかったが、二回目は余裕をもって準備できた。また、ポスターやチラシを作成して対外的なPRを行ったおかげで、新聞などにも取り上げられ、十分に周知を図ることができた。このイベントを軌道に乗せられたのは助成制度のおかげ」

商店街に場所を移して

第三回の開催は今年十月十三日。今年度は「自助努力開催」を原則にしている。このため、来場者の試食料金（これまでは百円）の引き上げや、コンテスト参加料の新設も検討しているという。

「当日にお手伝いしてくれる方は何人もいますので、補助金に頼らずに今年開催することができれば、今後継続していけると思う」と阿部さ

んは言う。

しかし、「作って楽しい」「食べて楽しい」が先行して、原点である男女共同参画推進についてはあまり伝わっていないという厳しい意見も実行委員会に寄せられているようだ。

これに対して、佐藤さんは市の立場として「確かに、カレーづくりが男女共同参画にすぐに繋がるわけではないが、このイベントを、市民が男女共同参画について考える一つのきっかけとなるよう、機運を高めていきたいと思っている。そのために、地域との繋がりをより強くしていきたい」と言う。

阿部さんは最後に「市民を巻き込むために、今年は地元商店街で開催します。商店街の方と協力して開催することで、地域に根差したイベントへと育てたい。逆に商店街の方から『うちで開催してほしい』と言われるようになるよう、盛り上げていきたい」と抱負を語った。

今後も引き続き全国に向け発信することで、鹿角市といえば「男女でつくるうまカレーのまち、男女協同参画のまち」と言われる日まで、町ぐるみの取り組みは続く。

（財）地域活性化センター

編集委員 ● 大窪千絵

総務省地方行財政重点施策 および 地域活性化施策説明会開催のご案内

(財)地域活性化センターでは、毎年全国各地で地方公共団体を対象として、総務省による来年度の重点施策の説明と併せて、当センターが行う助成事業を中心とした各種業務の説明会を開催しています。

今年度の説明会は、9月18日(火)～10月11日(木)の期間に、岩手・山形・茨城・神奈川・山梨・富山・三重・奈良・和歌山・山口・香川・大分・熊本・沖縄の14会場で左下表の通り開催します。ぜひご参加ください。

＜申し込み方法＞

各地方公共団体の地域振興担当課などにお配りした申し込み用紙に必要事項をご記入の上、FAXで申し込みいただくか、当センターのホームページからお申し込みください。

※各会場の定員になり次第締め切ります。



昨年度説明会

開催都道府県	開催日	開催会場	参加定員	申込期日
茨城県	9/18(火)	茨城県開発公社	70人	9/7(金)
熊本県	9/19(水)	メルパルク熊本	70人	9/7(金)
岩手県	9/20(木)	アイーナ	60人	9/7(金)
山梨県	9/21(金)	山梨県自治会館	50人	9/7(金)
神奈川県	9/25(火)	波止場会館	60人	9/14(金)
沖縄県	9/26(水)	サザンプラザ海邦	60人	9/14(金)
山形県	9/27(木)	山形県自治会館	60人	9/14(金)
大分県	9/28(金)	つるみ荘	50人	9/14(金)
三重県	10/2(火)	三重県総合文化センター	50人	9/21(金)
奈良県	10/3(水)	奈良県新公会堂	60人	9/21(金)
和歌山県	10/4(木)	和歌山県自治会館	50人	9/21(金)
山口県	10/5(金)	翠山荘	50人	9/21(金)
香川県	10/10(水)	サンポートホール高松	50人	9/28(金)
富山県	10/11(木)	サンシップとやま	50人	9/28(金)

センターホームページには、[地域活性化]検索で

スポーツ拠点づくり推進事業

2008年度 新規承認大会募集中

当センターでは「スポーツ拠点づくり推進事業」において、現在全国60の大会を承認しております。現在、2008年からの大会について、新規に承認を希望する市町村を募集しています。締め切りは07年9月28日(金)です。審査はスポーツ拠点づくり推進委員会で行われ、承認されたものは08年より助成を受けることができます。

詳しくは当センターホームページ、または担当まで。
〈担当〉情報サービス 渡井・高橋
〈電話〉03-5202-6135



地域再生実践塾の開催決定

参加者大募集！

当センターでは、地域再生の担い手の育成を目的に、地域の再生・活性化の先進事例地において実践的な手法の習得を目指すワークショップ「地域再生実践塾」を全国5カ所で開催しています。現在、第5回目の参加者を募集しています。ふるってご参加ください。

第5回 ブランドイメージと地域の活性化

＜群馬県草津町・高崎市＞

主任講師 大宮登氏(高崎経済大学教授)

開催日 11月13日(火)～16日(木)

申込締切 10月24日(水)

◆対象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる人

◆募集人数: 40人

◆参加費用: 無料(開催地までの往復の交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担)

◆申込方法: 申込書を当センターまで送付してください。申込書の様式は当センターのホームページからもダウンロードできます。

*詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

○業務第2課 TEL 03-5202-6137

「花」のまちづくり／「花のまち」づくり



徳川家康ゆかりの寺である秋葉総本殿可睡斎の百合園
(金子満雄氏推薦)



東京の桜の名所・飛鳥山の崖下、JR京浜東北線の線路と挟まれた細道
は、知る人ぞ知るアジサイの道。探せば東京にも花の名所が結構ある



金子満雄氏の自宅の庭



これも花火です
当センターの地元で開かれた花火大会（第20回東京湾「大華火」祭）

手前みそ
ですが…

徳島県

美波町

104



5月中旬～8月中旬にかけて、アカウミガメが産卵のため上陸してくる



徳 島県美波町は二〇〇六年三月三十一日に日和佐町と由岐町が合併して誕生した。人口は九千人弱。大阪駅前から高速バスで三時間四十分で着く。「美波」の名が示す通り、太平洋に面した「波が美しい海岸の町」であり、ウミガメが産卵にくる砂浜があることで知られている。

ウミガメが産卵にくる町

日和佐八幡神社秋まつりは、8台のチョーサ（太鼓屋台）が勇壮に大浜海岸へ練り出す県内随一の秋祭り



薬王寺は四国88ヶ所第23番札所で国道55号沿いにある

しかし、この海岸線は砂浜だけではなく、海食崖、海食窪、海食洞など変化に富んだリアス式で、多くは「室戸阿南海岸国定公園」に指定されている。真冬でも海水温が十度以下になることはなく、海岸部や離島では亜熱帯植物が見られる。

10月の由岐伊勢エビまつりは、由岐漁港に水揚げされた魚介類を格安で即売。伊勢エビ長寿汁や伊勢エビ酒の振る舞いも



「田井ノ浜」は延長1キロの白砂の浜。絶好の海水浴場だ



9月

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 9月5日
近畿6府県首都圏観光連絡協議会
- 9月6日～7日
田辺ほんまもん発信推進協議会
- 9月12日～14日
群馬県
- 9月20日～21日
甲府市出品協会
- 9月27日～28日
市川市（千葉県）

★ふるさと情報プラザ

- 9月3日～7日
長野県町村会
信州縦断 ～元気なふるさと収穫祭めぐり2007～
- 9月11日～13日
枝幸町（北海道）
～森と海の魅力発信！～ オホーツク枝幸！ 食べ尽くしキャンペーン
- 9月19日～21日
北川辺町（埼玉県）
「利根の清流米」きたかわ産コシヒカリフェア
- 9月25日
小田原市（神奈川県）
かまぼこ、干物に梅・木工 ～ 目指せ！小田原ブランド展
- 9月26日～28日
鏡野町（岡山県）
紅葉と魅惑の特産品！ “紅”が彩る鏡野町展

(写真) 1 但馬観光キャンペーン in 東京 (7/5～6)
2 第2回山陰山陽観光物産フェア (7/26～27)
＜以上日本橋プラザビルイベントスペース＞



10月

(*は仮題)

★日本橋プラザビルイベントスペース

- 10月3日～5日
福智町（福岡県）
- 10月11日～12日
須坂市（長野県）
- 10月17日～18日
五泉市（新潟県）
- 10月24日～26日
小城市（佐賀県）
- ★ふるさと情報プラザ
- 10月1日～2日
田川市（福岡県）
炭坑節の町 田川の観光物産展*
- 10月3日～5日
天龍村（長野県）
天龍村 観光物産展*
- 10月9日～12日
渋川地区観光特別宣伝協議会
渋川地域と伊香保温泉の観光PR展*
- 10月15日～19日
浜松市（静岡県）
食欲の秋！ 海の幸から山の幸まで浜松をまるかじり*
- 10月22日～23日
静岡市
大道芸人 in 静岡 PR展*
- 10月24日～26日
小松市（石川県）
小松市観光物産展*
- 10月29日～11月2日
長崎市
長崎市観光物産展*

(写真) 3 京・丹後の季風 (7/9～11)
4 木曾路の涼を求めて！ (7/31～8/2)
＜以上ふるさと情報プラザ＞

《日本橋から》

アジア某国に駐在していた際、カメラマンとして雇っていた青年が、商用で日本に来て、その合間に立ち寄ってくれた。昼食を食べ、コーヒを飲み、東京駅まで歩いていく途中だった。路地の入り口に「花の無人販売籠」(右下写真)が出ていた。

彼は「これが、できる!」と、熟(こ)れていない日本語で尋ねた。「お金を入れた振りをして無料(ただ)で持っていけるとか、料金箱ごと盗まれるとか…そんなことがなく…」。

一瞬、考え込んだ隙に彼は続けた。「この辺にも、わが国から来た若者が働いているでしょ。危ないよ、危ないよ」。

『犯罪白書』の「来日外国人の犯罪」の項を読んだ直後だったので本当に詰まってしまう、ようやくにして「こうして続けているのは盗まれないからだろう」と答えた。

彼は「日本はやはり素晴らしい。国に帰ったら皆に伝える」と、手を振りながら駅前の雑踏の中に消えていった。気持ち良く別れたのだが、今は彼が、その国で犯罪者並みに扱われる「親日派」との指弾を受けないかと案じている。

(編集長・室谷克実)



【10月号予告】
特集Ⅱ合併後のまちづくり

地域づくり9月号

2007年9月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

or

宝くじにもあります。

せうかくの当たりも、支払い期限を過ぎたら“アウト”。
宝くじを買ったら、早めに調べて換金しましょう。

※宝くじ当せん金の支払い期限は、宝くじ券に明記されています。



宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



財団
法人

日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>